



日本生態学会

No.30

2013年5月

ニュースレター

[目次]

日本生態学会各賞候補者募集	1
第 61 回日本生態学会大会（広島）案内	5
第 60 回日本生態学会大会（静岡）総括報告	10

記事

I. 第 60 回大会総会、全国委員会、各種委員会報告承認決議事項	13
A. 報告事項	
B. 承認事項	
C. 決議事項	
II. 第 60 回日本生態学会大会記録	30
III. 書評依頼図書	33
IV. 寄贈図書	34
V. 交換雑誌目録	34

お知らせ

1. 公募	35
書評	36
公募カレンダー	40
日本生態学会役員一覧	42
京都大学生態学研究センターニュース	45

◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。
新年度の会費は12月に請求をします。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。
下記会費および地区会費の合計を次の口座にお振込ください。

郵便振替口座番号 01070-6-19256 口座名：日本生態学会

退会する際は前年12月末までに退会届を事務局まで提出してください（ウェブサイト申込フォーム有り）。
会費を1年分滞納した会員には会誌の発送を停止し、2年分滞納した時は自動的に退会処分となります。

会員の区分と個人会員の権利・会費 2013年をもってABC会員は完全廃止になります

会員種別	年会費* (保全誌購読者**)	大会発表	総会・委員 (選挙・被選挙権)
正会員（一般）	11000 円 (13000 円)	○	○
正会員（学生）	8000 円 (10000 円)	○	○
団体会員	22000 円	×	×

*生態学会では収入の少ない若手一般会員のために、学会費・大会参加費を学生会員と同額にする措置を実施します。
詳細はウェブサイトをご覧ください。

**非会員の方の保全誌定期購読料は年額 5000 円です。
なお、保全誌は発行後2年間、オンラインアクセスができません

【論文投稿の権利】

- | | |
|----------------------|------------------|
| ・日本生態学会誌 | 正会員のみに有 |
| ・保全生態学研究 | 正会員・保全誌定期購読者のみに有 |
| ・Ecological Research | 投稿権利は会員に限定されません |

【冊子を必要としない（オンラインアクセスのみの）会員への割引】

- | | |
|----------------------|-------|
| ・日本生態学会誌 | 600 円 |
| ・Ecological Research | 900 円 |

既会員の方が今後申請される場合は、割引を受けたい年の前年10月末までに問い合わせページを通じて事務局へご連絡ください。

新たに入会される方は入会時に申請があれば入会年より適用されます。

地区会費

正会員は、住所（所属機関か自宅のうち、郵送物の配布先となっているほう）により、地区会に参加することになっています。各地区会ではそれぞれ独自に地区会費を定めています。学会費の納入時には、これらも含めて請求しますので、あらかじめご了承ください。

- ・北海道地区（200 円）：北海道
- ・東北地区（600 円）：青森県・岩手県・宮城県・秋田県・山形県・福島県
- ・関東地区（500 円*）：茨城県・栃木県・群馬県・埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県・山梨県
- ・中部地区（0 円）：長野県・新潟県・富山県・石川県・福井県・岐阜県・静岡県・愛知県・三重県
- ・近畿地区（400 円）：滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県
- ・中・四国地区（400 円）：鳥取県・島根県・岡山県・広島県・山口県・徳島県・香川県・愛媛県・高知県
- ・九州地区（700 円）：福岡県・佐賀県・長崎県・熊本県・大分県・宮崎県・鹿児島県・沖縄県

*2014年より400円（ただし当面は徴収しない）

問い合わせ先：日本生態学会事務局

〒603-8148 京都市北区小山西花池町 1-8

Tel&Fax 075-384-0250 <http://www.esj.ne.jp/>

※お問い合わせはウェブサイトからお願い致します。

日本生態学会各賞候補者募集

第 12 回「日本生態学会賞」

顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たした本学会員に対して授与される日本生態学会の最も権威ある賞です。受賞者は会員から推薦された候補者の中から選考され、大会時において表彰されます。

第 18 回「日本生態学会宮地賞」

生態学に大きな貢献をしている本学会の若手会員に対して、その研究業績を表彰することにより、わが国の生態学の一層の活性化を図ることを目的とするものです。会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として 3 名の受賞者を選考し、「日本生態学会宮地基金」から各々 10 万円の賞金が贈呈されます。

第 7 回「日本生態学会大島賞」

例えば野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本学会の中堅会員を主な対象とした賞です。会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として 2 名の受賞者を選考し、「日本生態学会大島基金」から各々 10 万円の賞金が贈呈されます。

第 2 回「日本生態学会奨励賞（鈴木賞）」

学位取得後 4 年くらいまで（大学院生を含む）の今後の優れた研究展開が期待できる研究者に授与される賞です。自薦による応募者もしくは本学会員により推薦された者の中から若干名の受賞者を選考し、「日本生態学会鈴木基金」から各々 5 万円の賞金が贈呈されます。

記

1. 受賞候補者の条件：本学会員
2. 書式：生態学会ウェブサイト (<http://www.esj.ne.jp/>) よりダウンロード
3. 送付先：〒 603-8148 京都市北区小山西花池町 1-8
日本生態学会事務局気付
日本生態学会〇〇賞選考委員会委員長
(〇〇は応募する賞名を入れて下さい)
4. 締め切り日：2013 年 8 月 15 日（必着）

日本生態学会賞細則

- 第1条 日本生態学会賞は、本学会員で、顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たし、本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、受賞は毎年原則として1名とする。
- 第2条 日本生態学会賞候補者を選考するため、日本生態学会賞候補者選考委員会（以下委員会）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は全国委員の推薦により9名を選出するが、生態学の各分野に偏りの無いように配慮する。委員長は委員の互選により毎年定める。委員の任期は3年とし、毎年3名を改選する。ただし任期満了後2年間は再任されない。
- 第4条 推薦者は、推薦理由を添えて候補者を推薦するとともに、委員会の求めに応じて必要な資料を提出しなければならない。
- 第5条 委員会は推薦理由をもとに受賞候補者を絞り、推薦者が提出する資料にもとづいて若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、原著論文業績の他に啓蒙的役割を果たした著書類及びそれらの国内外の波及効果に留意する。
- 第6条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第7条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を全国委員会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、全国委員会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第8条 受賞者の決定は、受賞式が行われる3ヶ月前までに行う。
- 第9条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状及び記念品を贈呈する。
- 第10条 受賞者は、原則として、その授賞式が行われる大会において記念講演し、その内容を本学会の学会誌に総説として投稿する。
- 第11条 この細則の変更には全国委員会の3分の2以上の同意を要する。

日本生態学会宮地賞細則

- 第1条 日本生態学会宮地賞（以下宮地賞という）は、生態学の優れた業績を挙げた本学会の若手会員で、自薦による応募者もしくは本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として3名とする。
- 第2条 宮地賞受賞候補者を選考するため、宮地賞受賞候補者選考委員会（以下委員会という）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。
- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、日本生態学会の英文誌または和文誌への本人の掲載論文の有無、及び会員歴にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を全国委員会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をす

- る。また、受賞候補者が無い場合には、全国委員会の手承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第7条 受賞者の決定は11月中旬までに行う。
- 第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および宮地基金より賞金10万円を贈呈する。
- 第9条 受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本学会の学会誌に投稿する。
- 第10条 この細則の変更には全国委員会の3分の2以上の同意を要する。

日本生態学会大島賞細則

- 第1条 日本生態学会大島賞（以下大島賞という）は、例えば野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本学会の中堅会員を主な対象とし、自薦による応募者もしくは本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として2名とする。
- 第2条 大島賞受賞候補者を選考するため、大島賞受賞候補者選考委員会（以下委員会という）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。
- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては研究の継続期間や会員歴にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者となり選考の最終段階まで候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を全国委員会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、全国委員会の手承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第7条 受賞者の決定は11月中旬までに行う。
- 第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および大島基金より賞金10万円を贈呈する。
- 第9条 受賞者は受賞の対象となった研究課題について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説・解説等を本学会の学会誌に投稿する。
- 第10条 この細則の変更には全国委員会の3分の2以上の同意を要する。

日本生態学会奨励賞（鈴木賞）細則

- 第1条 日本生態学会奨励賞（以下奨励賞という）は、本学会の会員であり、学位取得後4年くらいまで（大学院生を含む）の今後の優れた研究展開が期待できる研究者で、自薦による応募者もしくは本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として若干名とする。
- 第2条 奨励賞受賞候補者を選考するため、奨励賞受賞候補者選考委員会（以下委員会という）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。

- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、会員歴にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者あるいは推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を全国委員会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、全国委員会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第7条 受賞者の決定は11月中旬までに行う。
- 第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および鈴木基金より賞金5万円を贈呈する。
- 第9条 受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本学会の学会誌に投稿する。
- 第10条 この細則の変更には全国委員会の3分の2以上の同意を要する。

第 61 回日本生態学会大会（広島）案内

第 61 回日本生態学会大会（公式略称 ESJ61）は、大会実行委員会および大会企画委員会により、下記の要領で開催されます。

連絡先

〒 739-8521 東広島市鏡山 1-7-1 総合科学研究科気付

第 61 回日本生態学会大会（ESJ61）実行委員会

担当：中越信和（大会会長）、中坪孝之（大会実行委員長）

大会公式ホームページ <http://www.esj.ne.jp/meeting/61/>

本大会に関する問い合わせは、大会公式ホームページからリンクしている問い合わせページからお願いします（学会事務局にお問い合わせいただいても対応できません）。

大会に関する最新情報は、大会公式ホームページで確認して下さい。

日程・会場

2014 年 3 月 14 日（金）～ 18 日（火）

広島国際会議場

〒 730-0811 広島市中区中島町 1-5（平和記念公園内）

URL: <http://www.pcf.city.hiroshima.jp/icch/>

詳細は次号のニュースレターでお知らせします。

大会の概要

- ・ ESJ61 では英語によるプログラムの実施を奨励し、英語使用者にも魅力ある大会になるような運営を目指します。また、日本に滞在中の留学生や海外からの参加者を歓迎します。
- ・ 英語口頭発表賞を新規に実施します。申込締切は 7 月 31 日です。詳しくは英語口頭発表賞の詳細をご覧ください。
- ・ ESJ61 で発表するためには、発表申込時に会員である必要があります。非会員が講演・企画を希望される場合は、2013 年 10 月 23 日（水）までに 2014 年の入会を申し込むとともに、2014 年の学会費を納入して学会員となって下さい（会費滞納による退会者の再入会の場合も同様）。
- ・ 大会参加費、懇親会費などの納入方法は、次号のニュースレターで詳しくお知らせします。また、学部生の参加を促進するために、参加費の大幅な割引もしくは無料化を検討中です。
- ・ 今大会から、冊子体及び PDF 版の講演要旨集は廃止されます。詳しくは生態学会ホームページの「会長からのメッセージ（4 月 22 日更新）」をご覧ください。

公開講演会

講演会タイトル：「里山のこれまでとこれから」

日時：2014 年 3 月 16 日（日）13:00 ～ 16:30

会場：広島国際会議場

内容の詳細については、次号のニュースレターでお知らせします。

大会参加資格一覧

会員種別ごとの参加資格は以下の通りです。なお講演の重複制限については、各集会および一般講演の詳細をご覧ください。

講演種別 \ 会員種別	正会員 (旧 AB)	非会員・保全誌定期購読者 (旧 C)
一般講演 (口頭・ポスター)	○	
シンポジウム企画	○	
シンポジウム講演	○	○
シンポジウム・企画集会・自由集会のコメンテータ *1	○	○
企画集会企画	○	
企画集会講演	○	○ *2
自由集会企画	○	

*1 要旨を登録しないコメンテータ。要旨登録を行うコメンテータの資格は「講演」に準じます。

*2 実行委員会が特別に認めた場合に限り、集会あたり 1 件まで可能です。

・自由集会のみに講演者または聴衆として参加する場合には、大会参加費は不要です。

・高校生ポスター発表会については、高校生ポスター発表会「みんなのジュニア生態学」の詳細をご覧ください。

・非学会員でも、大会参加費をお支払いいただければ、聴衆として参加できます。

提案、申込の受付開始・締切

【受付開始】

シンポジウム企画提案 2013 年 5 月 27 日 (月) から

英語口頭発表賞エントリー 2013 年 5 月 27 日 (月) から

他の申込み 締め切りの 1 ヶ月程度前から

【締切】

新規に入会 (未納退会で再入会) する講演者・企画者の入会申込 2013 年 10 月 23 日 (水) 17:00

(入会手続き <http://www.esj.ne.jp/office/member/index.html> を参照)

新規に入会する講演者・企画者の 2014 年学会費入金 2013 年 10 月 23 日 (水) 入金分

シンポジウムの企画提案 2013 年 7 月 31 日 (水) 17:00

英語口頭発表賞エントリー 2013 年 7 月 31 日 (水) 17:00

企画集会申し込み 2013 年 11 月 7 日 (木) 17:00

自由集会申し込み 2013 年 11 月 7 日 (木) 17:00

一般講演申し込み 2013 年 11 月 7 日 (木) 17:00

講演要旨登録 大会の 1 ～ 2 ヶ月前

一般講演口頭発表用ファイルの登録 大会の数日前

※適宜、大会公式ホームページで要確認 (スケジュールに変更の可能性有)。

※すべての締切に関して、締切後の追加、修正等の依頼には対応できません。

ESJ61 シンポジウムの企画案の公募

ESJ61 では、大会シンポジウムの企画案を会員から募集します。大会の中心となる集会となりますので、下記の趣旨をご理解のうえ、奮ってお申し込み下さい。シンポジウムの開催時間は約 3 時間の予定です。大会シンポジウムの企画は、2013 年 7 月 31 日 (水) 17:00 までに大会公式ホームページからご提案下さい。

【企画内容について】

・大会参加者は、毎年多様なテーマに関するシンポジウムが開催されるとともに、それまでにはなかった新鮮なテーマのシンポジウムが開催されることを期待しています。大会企画委員会は、シンポジウム企画経験の少ない方からの企画提案を歓迎します。

・企画案は講演者が決まっていない Seeds 段階のものでもかまいません。

・他分野との交流を深めるため、生態学会会員以外の方に招待講演をしていただくことも可能です。招待講演者の参加費は無料となります。

- ・若手研究者からも意欲的な提案を期待しています。

【英語使用について】

- ・日本生態学会では、留学生や海外からの研究者による大会参加が増えています。今後もさらに大会参加者どうしの研究交流が進むことを目指して、ESJ61では、シンポジウム・集会等における英語の使用（日本語との併用を含む）を奨励します。
- ・英語で開催されるシンポジウムは優先的に条件の良い部屋に割り付けます。
- ・日本語で開催されるシンポジウム・集会では、可能な範囲で、スライドでの英語の併記や簡単な英語版ハンドアウトの用意などの工夫をお願いします（ハンドアウトや二か国語スライド等は、英語開催のシンポジウム・集会において非英語話者の参加を促すのにも有効です）。
- ・ESJ61では、シンポジウムで講演する海外研究者のうち1名以上をEcological Research誌による招聘講演者として採用予定です。招聘講演者は旅費の支給を受ける事ができ、大会参加費も無料となります。大会後に講演内容に関連する高質なレビュー記事をEcological Research誌に投稿していただくことが原則となります。

【企画案の採用について】

- ・大会企画委員会は応募された企画案を検討し、大会全体のバランスに配慮して、採択する提案を決定します。
- ・採択された企画の提案者には企画者（オーガナイザー）としての参加を要請します。
- ・大会企画委員会はコーディネータを出して各シンポジウムの企画運営を支援し、シンポジウム間の調整を行います。
- ・企画案が多数寄せられ会場のキャパシティを超えてしまう場合や、内容的にシンポジウムとしての開催が難しいと判断される企画がある場合は、企画集会や自由集会として再提案していただくことがあります。

【応募の制限について】

- ・企画者は日本生態学会正会員に限りです。非会員は企画者（企画の責任者および連名の共同企画者を含む）になれません。
- ・異なるシンポジウム間で重複して企画者または講演者となることはできません（「講演者」は「講演の主たる説明者」を意味します。以下同様）。企画段階で重複が確認された場合には、コーディネータを通じて調整をお願いします。
- ・シンポジウムの企画者・講演者は企画集会の企画者・講演者になることはできません。
- ・シンポジウムの企画者・講演者は一般講演（口頭発表、ポスター発表とも）の講演者にもなれません。
- ・要旨登録を行う「趣旨説明」や「コメント」は1講演とみなされ、その応募資格や重複制限は「講演」に準じます。要旨登録を伴わない趣旨説明やコメントは講演には数えません。

企画集会と自由集会

ESJ61では、企画集会と自由集会を募集します。下記の趣旨をご理解のうえ、奮ってお申し込み下さい。企画集会・自由集会ともに、企画者は日本生態学会正会員である必要があります。企画集会、自由集会とも開催時間は約2時間の予定です。いずれの集会についても、大会企画委員会は内容に関与しませんが、概要などに個人および団体を誹謗中傷する内容などを含むと判断されるものについては、その限りではありません。

【企画集会】

- ・企画集会の個別の講演の要旨は、講演要旨集に掲載されます。全体の趣旨説明と概要もプログラムと講演要旨集に掲載されます。
- ・企画集会の企画者・講演者はシンポジウム及び他の企画集会の企画者・講演者となることはできません。
- ・企画集会の企画者・講演者は一般講演（口頭発表、ポスター発表とも）の講演者にもなれません。
- ・企画集会での講演者（主たる説明者）は原則、日本生態学会正会員に限定されます。非会員による講演は特に事情がある場合に限り、企画あたり1件まで認められます（企画提案時に理由を記載して下さい）。ただし、同一の非会員が2年連続で、企画集会で講演することは認められません。
- ・要旨登録を行う「趣旨説明」や「コメント」は1講演とみなされ、その応募資格や重複制限は「講演」に準じます。要旨登録を伴わない趣旨説明やコメントは講演には数えません。
- ・限られた会場を平等に分け合って使用するため、企画集会はできるだけ3人以上の講演者で構成して下さい。

【自由集会】

- ・自由集会は、新しい分野の立ち上げを助け、生態学の枠組みからはみ出す話題についても自由に議論できる場として、生態学会が伝統的に重視してきた集会です。しかしあくまでも関連集会であって、大会の正式行事ではありませんので、自由集会のみの参加者は大会参加者とはみなされません。

- ・自由集会では、全体の趣旨説明と概要のみがプログラムと講演要旨集に掲載され、個別の講演の要旨は掲載されません。
- ・一般講演、シンポジウムなどとの重複発表は認められますが、原則として日程の調整は行いません。
- ・大会の正式行事ではありませんので、会場は集会主催者が責任をもって管理して下さい。

【応募要領】

企画集会または自由集会の開催を希望される方は、2013 年 11 月 7 日（木）17:00 までに大会公式ホームページからお申し込み下さい。企画集会については、集会の提案・概要登録時に、講演者および共同発表者と講演タイトルも併せて登録します。また、企画集会・自由集会の企画者、および企画集会の講演者は、集会提案時までに大会への参加登録を済ませて登録番号を取得しておく必要があります。これらの締め切りはすべて 11 月 7 日（木）17:00 です。ご注意下さい。

【企画集会と自由集会の採否について】

- ・企画集会は、自由集会に優先して採択されます。提案された集会（企画集会・自由集会）の数が会場の収容可能数を上回る場合には、全部の自由集会の開催を取りやめても会場が足りない場合にのみ抽選を行い、企画集会の採否を決定します。
- ・自由集会の提案数が会場の収容可能数を上回る場合には、同一会員が重複して複数の集会（自由集会・企画集会）の企画者となっている自由集会を不採択とします。次に、大会シンポジウム企画者による自由集会を不採択とします。それでも数が多い場合には、抽選で自由集会の採否を決定します。
- ・限られた場所と時間を分け合って使うため、シンポジウムおよび企画集会の企画者・講演者は自由集会の企画を可能なかぎりご遠慮下さい。2 つ以上の自由集会の企画・講演もご遠慮下さい。
- ・開催の可否については、11 月 18 日（月）までにメールでご連絡します。

大会シンポジウム・企画集会・自由集会の違いは以下の通りです。

	シンポジウム	企画集会	自由集会
位置づけ	大会の核となる集会。大会の正式行事	シンポジウムに次いで核となる集会。大会の正式行事	様々な話題を自由に議論できる場。大会の正式行事ではありません
開催時間	約 3 時間	約 2 時間	約 2 時間
開催の優先度	最優先されます	シンポジウムの次に優先されます（自由集会の開催を全て取りやめても会場が足りない場合のみ、抽選で採否を決定します）	優先されません（会場が足りない場合は抽選で採否を決定します）
日程・時間	最優先されます（聴衆の集まりやすい日時に割り当てられ、同時開催集会が少なくなるよう考慮されます）	シンポジウムの次に優先されます	優先されません
企画運営段階での企画委員会の関与	関与します。企画委員がコーディネータとして企画運営を支援します。内容の重複がみられる場合、複数のシンポジウムの合体を勧めることがあります	特定の個人や団体を誹謗中傷する内容がないかだけを審査します	特定の個人や団体を誹謗中傷する内容がないかだけを審査します
企画者の資格	正会員	正会員	正会員
非会員による講演	奨励します（審査の上、招待講演者として参加費を免除します）	集会あたり 1 件まで可（同一非会員の 2 年連続は不可）。大会参加費を支払う必要があります	認められます（自由集会での非会員講演者が大会の他行事に参加する場合には、大会参加費を支払う必要があります）
海外からの招待講演者への学会からの旅費支給	大会全体で 1 名以上認められます	なし	なし
一般講演との重複発表	不可	不可	可
他集会との重複発表	自由集会・フォーラムのみ可能	自由集会・フォーラムのみ可能	全て可能
提案締切日	7/31（水）	11/7（木）	11/7（木）
概要登録 / 集会の概要及び講演者（主たる発表者及び共同発表者）と発表タイトルの登録締切日	11/7（木）	11/7（木）	11/7（木）
プログラムおよび要旨集への掲載内容	集会概要が掲載されます。要旨集には各講演の要旨も掲載されます	集会概要が掲載されます。要旨集には各講演の要旨も掲載されます	集会概要のみ掲載されます

フォーラム

学会内の各種委員会等によって企画されるフォーラムを数件開催する予定です。フォーラムとは、各種委員会から提案され、生態学会が取り組んでいる生態学に関連する課題について広く会員の意見を募り、会員相互の情報共有を促すことや、広範な議論により学会内の合意を形成することを目指すものです。なお、フォーラムの企画やフォーラムでの話題提供は、重複発表制限の対象となりません。

一般講演

- ・一般講演には口頭発表とポスター発表があります。申し込み時に希望をお聞きますが、会場の都合でご希望に沿えない場合もあります。
- ・口頭発表では、英語での発表・討論を経験する機会を提供し、日本語を解さない参加者との交流を図るために、英語での発表を歓迎します。ただし、英語での発表の申し込み数によっては、分野にこだわらずに英語での発表を集めたセッションに回っていただく場合があります。
- ・発表内容に応じて会場・時間の割り振りを行いますので、発表申し込み時に適切な分野を選んでいただきます。ESJ61における発表募集時の分野の区分については、現在、企画委員会で検討しており、決定次第ホームページでお知らせしますので適宜ホームページでご確認下さい。なお、応募状況に応じて募集時の区分は統廃合されますので、大会開催時の分野区分は募集時のそれと異なる可能性があります。予めご了承下さい。

【注意】

- ・一般講演の演者は、日本生態学会正会員に限ります（共同発表者は会員である必要はありません）。
- ・1人で2つ以上の講演の演者になることはできません（共同発表者になることは差し支えありません）。
- ・さらに、シンポジウムおよび企画集会の企画者・講演者は一般講演は行えません（口頭・ポスターとも）。これらの制限は、いずれも限られた場所と時間を分け合って使うための措置ですので、ご了承下さい。

高校生ポスター発表会「みんなのジュニア生態学」

高校生ポスター発表会「みんなのジュニア生態学」は、正式企画になりました。第60回静岡大会では学年末試験の多忙な時期にもかかわらず、3月9日（土）に26件の発表があり、最優秀賞、優秀賞などたくさんのポスターを表彰しました。引き続き、第61回広島大会でも高校生ポスター発表会「みんなのジュニア生態学」を開催します。生態学の社会への普及のため、日本生態学会によるアウトリーチ活動の一環として企画します。

高校生（中学生も歓迎です）にポスター発表をしていただき、生態学諸分野の専門家や学生、他の参加校との交流を通して、生態学全般への関心をもていただくのが本企画のねらいです。生き物の生態や環境に関わる生物学の内容であれば、どのような分野や題材の発表でも大歓迎です。参加費は無料です。

開催日時や参加申込み・要旨登録・授与される賞等の詳細については、次号のニュースレター／日本生態学会公式HP／全国規模のML等で配信しますので、ぜひお知り合いの高校教員や高校生に周知していただきますよう、よろしくお願いします。

英語口頭発表賞

ESJ61では、英語口頭発表賞を設け審査を実施します。賞の目的は、大会における英語による研究発表を振興し、留学生や国外からの参加者との議論の場をより多く作ることです。特に若手研究者のコミュニケーション能力と国際的情報発信力を高める機会を増やすことを重視しています。参加される方は英語口頭発表賞ホームページを見て7月31日までにメールで申し込んで下さい。また、最新の情報も同ホームページに随時掲載されますので、興味のある方は定期的にチェックして下さい。

<https://sites.google.com/site/esj61engpresenawarden/>

ポスター賞

ESJ61では、若手（学位未取得者）の研究を奨励するために、優秀なポスター発表に賞を贈ります。ポスター発表では、日本語を理解しない参加者への配慮を推奨します。ポスター賞の運営、応募資格、審査方法などについては、次号のニュースレターに掲載します。

エコカップ2014

大会サテライト企画として、親善フットサル大会 エコカップ2014が行われます。主催はエコカップ2014実行委員会です。詳細は追ってホームページでお知らせします。

第 60 回日本生態学会大会（静岡）総括報告

陀安一郎（大会企画委員会前委員長）

日本生態学会第 60 回大会（静岡大会）は、2013 年 3 月 5 日～9 日にわたって行なわれました。参加者は 2,423 名にも達し、公式集会として、シンポジウム 13 件、フォーラム 6 件、企画集会 17 件が開催されました。また今回、日本生態学会 60 周年を記念して、別枠として 60 周年記念シンポジウムも開催されました。一般講演数は口頭発表 211 件、ポスター発表 894 件の合計 1,105 件となりました。非公式集会である自由集会は 36 件ありました。今回から正式に日本生態学会企画委員会の運営となった高校生ポスター発表も 26 件ありました。

今回の大会は中部地区の担当でしたが、静岡県で初めての開催となりました。現在の生態学会大会は 2,000 名を超える参加者が集まることが定着しております。並行してセッションを行なうことができる会場数を、今回は 11 会場ご用意いただきましたが、ある程度の人数を収容できる会場をたくさん用意することは、コンベンションセンターなどであっても難しい要求であります。一方、ポスター発表者が多い現在の大会では、大きなポスター会場が必要ですし、総会・受賞講演にもたくさんの方々が参加できる会場が必要となります。懇親会を行える宴会場も含めると、大会を行える可能性のある都市がかなり限られるのではないかと懸念があります。その中で、今回大会実行委員会の中心になっていただいた静岡大学は少ない人数の中、増澤武弘大会会長、小南陽亮実行委員長を中心に大変なご努力をしていただきました。その上、実行委員会の方々も、静岡大学のほか、岐阜大学、信州大学、富山大学まで広がっており、地区会レベルのサポートも大変であったと思います。一連のご努力に感謝致します。

今期の大会企画委員会の運営について

今期の大会企画委員会は、複数部会に入っておられる方を含め 59 名で構成されました。登録受付、プログラム及び要旨集の編集・印刷など担当する運営部会（部会長：畑田彩さん）、シンポジウムのコーディネート業務、各種集会の会場割り振りなどを担当するシンポジウム部会（部会長：石田清さん）、口頭発表の順序と会場決め、プログラムの編成などを担当する発表編成部会（部会長：小南陽亮さん）、ポスター講演の割り振り、ポスター賞審査の段取りなどを担当するポスター部会（部会長：近藤倫生さん）の 4 部会に加え、新たに高校生ポスター部会を設置しました。東京大会から始まった高校生ポスターは、札幌大会、大津大会と、主として実行委員会が引き継いで運営しておりましたが、継続性を担保するためには企画委員会としての運営が不可欠ということで、本大会より正式に「高校生ポスター部会」として発足致し

ました。そして、東京大会の時に実行委員会および生態学会教育専門委員会として高校生ポスター発表を始められた嶋田正和さんに部会長となっていただきました。これらの経緯に関しては、日本生態学会誌でその取り組みに関して報告していただく予定ですので、ご期待ください。また、ポスター部会と高校生ポスター部会の連携のために、岸田治さんと山浦悠一さんには両方の連携を担っていただきました。嶋田部会長にはもう一年部会長をやっていただき、部会としての仕事をご整理いただき、今後の引き継ぎに関してもご検討いただくことになっております。高校生ポスター部会には、通常の学会員に対する対応以上の細かい対応をしていただきました。一方、高校生のポスター発表はどれもすぐれたもので感心しました。今回ご覧にならなかった学会員も次回はぜひご覧下さい。未来の生態学会を背負う人材がこの中から出てくるかもしれません。

また、高校生ポスターとともに若手の獲得に向けた方策として、今回学部学生以下に対して、聴講するだけの場合に限り参加費を無料にいたしました。いままで、学部学生であるかどうかということは申し込みフォームになかったため、学部学生が何人参加しているのかわかりませんでした。初めての試みのため、学生さんに伝わるのに時間を要しましたが、最終的に参加費免除で参加した数が 297 人に達し、それなりのインパクトがある数でした。ただ、これだけの無料参加者を抱えることは、経費の見通しを考える上で実行委員会の皆様に多大なご迷惑をおかけしました。また、皆さんの支払っていただいている参加費でカバーする訳ですから、議論すべきことはあると思います。できるだけ新しい学生さんに生態学会の魅力を伝え、学会に入ってもらおうという目的を持ちながら、如何に収支バランスをとるのが最適であるか。今後、生態学会として考えていくべきかと思ひます。

次に、本大会において実施した「非学会員が大会での発表や企画の申し込みをするためには、既会員の申し込み期限の 3 週間前に入会の申し込みを行い、2 週間前に支払いを行なうこと」という制度についてご説明申し上げます。この仕組みは大きな変更のため、5 月の大会案内の時点から告知しておりましたが、必ずしも皆様にご理解いただけた訳ではございませんでした。そのため、急遽入会期限を延長致しましたが、延長後の申込数は無視できない数でした。広島大会においては、生態学会連絡用メーリングリスト [ESJ-Info] の積極的活用など、「入会期限」について積極的な広報活動に務めたいと思ひます。このやり方は、非学会員の大会参加を促す上記 2 点の制度と一見相反するようと思われるかもしれません。今回の改訂は、いままで「講演するためには会員になっ

てもらう必要がある」ということを理解しておられない人がいたため、それを一人一人チェックして会員になってもらうよう事務局が願ひするという手続きを省略することで、表面には出ないいろいろな手続きが簡単になりました。たとえば、チェックするステップを省略することによって、今回「企画集会・自由集会の提案締め切り」をいつもより遅らせることが可能になりました。ボランティアシステムをとる限り、いずれ皆さんにも大会企画委員として役割分担していただく可能性があります。新しい仕組みを作ることによって、毎年新しい締め切りを理解していただくために大会案内をじっくりお読みいただく必要があることは申し訳ないですが、システムとして定着していくことで、少しでも企画委員会の負担を減らすことも必要であることをご理解いただきたいと思います。

皆様の目に見えないところでの改変についてひとつ紹介します。いままでは、どの集会を並行開催するかに関しては、客観的に判断することは非常に難しかったため、一切考慮しないという形ですすめてきました。しかし、今回シンポ部会において、石田清部会長と鈴木牧さんを中心に、できるだけ似たような企画が並行して行なわれないように、自動的に振り分けるシステムを作成していただきました。また、学会の委員会が主催するフォーラムもできるだけ並行開催しないよう検討していただきました。参加される方すべてに納得していただくような配置を考えることは、そもそも「解けない問題」ではありますが、労力をかけずに少しでもうまく配置することができればそれに越したことはありません。今後どのようにすすめるかは、さらにシンポ部会で検討されることと思います。

本大会において、会場によっては、聴衆の方々すべてが会場に入れないような場面がありました。そのようにお感じになった方には、ご迷惑をおかけいたしました。ただ、そもそもこの規模での開催地を選ぶことが大変になっていることもご理解いただきたいと思います。大会開催のためには、(1) 受賞講演などのための大規模な会場、(2) 多くのパラレルセッションを立てられるたくさんの中規模会場、(3) 多くのポスターをゆったり配置するための大規模ホール、(4) たくさんの人を収容する懇親会会場、(5) 大会参加者の宿泊地からの交通の便、(6) 現地の実行委員会の方々の数。ざっと考えただけでもこれだけの条件を満たす場所はそんなにありません。2,000 名を超える大会参加者を前提に、地区会持ち回りの現在の体制を継続する限り、大会を開催する負担がますます大きくなってきていることは生態学会全体として考えないといけない問題だと思っています。

今後の大会に向けての企画委員会の取り組みについて

昨年度が EAFES との合同大会であったために、今年いったん元に戻す前提でひとまずポスター賞の英語化を強力に押し進めました。その時に将来計画委員会が行な

ったアンケートを元にして、今回の総会でポスター賞の英語化についての提案がなされました。その上で、そもそも国際化とは何か、英語を用いれば良いのか、ポスター賞のそもそもの目的は、などの議論が白熱しました。これらの議論は何年も続いていますが、まだ全体のコンセンサスは得られていないようです。次回大会に向けて、現在将来計画委員会と大会企画委員会が連携して、どのような進め方をすればいいのかという議論をすすめています。その中で、英語発表賞という形で一つの試行が行なわれることになりつつあります。試みを通じて、よりよい生態学会大会のあり方を皆で考えていけることを期待しています。

今回、大会企画委員長としての反省点の一つとして、自由集会のあり方について実行委員会と意識がずれていたことがありました。自由集会は昔から「関連集会」という位置づけであり、大会が開かれる会場のなかで「空いているスロットを利用した、自由な関連集会」という意味合いがあります。昨年度実行委員会のメンバーであったときには、それほど違和感は感じなく、また企画委員会として伝統的にこういうものであると思っていたのですが、コンベンションセンターなどでは安全対策として「参加者の把握」というのが強く要請されるようです。今後の大会では自由の中にも「参加者の把握」を企画委員会としても考えなければいけないということが改めて問題点として浮かびました。

生態学会参加者の意識と企画委員会のありかたについて述べたいと思います。上記に書きましたように、企画委員会は生態学会の意向を受けて大会のあり方を考えるとともに、実行委員会と議論してその時の会場に応じて実現可能な開催計画をたてます。生態学会の大会は、皆の顔が分かる小規模の大会よりも大きいけれども、大きすぎて結局自分の関連分野しか行かない（行けない）大規模な大会ほどではないために、どの講演も何らかの関心をもって聞けるという絶妙な規模だと思います。それゆえ逆に、全体のバランスを見ながら運営する難しさがあり、どの対象の参加者に満足してもらうかが今後の運営として鍵になるかと思っています。それとともに、大会企画委員会と実行委員会の負担も考えながら、どこかで「落としどころ」をつけないといけなくともあり、なかなかすっきりとした「正解」もありません。大会企画委員会は、その中で絶えずいろんな議論しています。昨年度実行委員会、本年度企画委員会に携わった身としていろんな立場で考えてみるのですが、悩みはつきません。

例えば、重要な議題は大会の総会において会員皆で議論を行ない決定されますが、個々の運用ルールについては常任委員会、もしくは企画委員会が決定しないといけないことも数多くあります。しかしながら、会員の皆様にとっては必ずしもこれらの決定に納得できないことがあるかも知れません。いままで重要な決定には「アンケート」を実施してご意見をいただいていたのですが、必ずしも一つ一つの決定についてアンケートをとって意見分布を見るのも難しいでしょう。これについては、松田会

長から、会員の意見を聞く「目安箱」を設置し広くいろいろなご意見を募ろうという案が出ています。今後、このような「目安箱」を通していろんな意見を聞くことにより、運営側の労力負担を少しでも減らしながら、少しでもよい方向に大会が運営されることを祈っております。

現在、大会企画委員会では久米篤委員長のもと、広島大会への準備が進められています。総会での議論を受けて、将来計画委員会としっかり連携しながら、生態学会における「国際化」をどのように進めるべきかという議論が行なわれています。また、実行委員会と連携しながら、大会会場の諸事情に応じた運営案が議論されています。大会企画委員会と大会実行委員会にとっては、一つの大会の終了が次の大会の「スタート」になり、絶えず大会のことを考える一年が始まります。大会がこのようなボランティアによって開催されていることをご理解いただいたうえで、参加者の皆さんは一年に一回の大会を楽しんでいただき、共に今後の生態学会の発展に寄与していただきたいと思います。

*以下に、ポスター賞の審査をしてくださった皆さんのお名前を記して、あらためてお礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。

相川真一、相川高信、赤坂宗光、天野達也、綾部慈子、安藤元一、飯尾淳弘、飯島勇人、池田紘士、石川尚人、石田真也、石田弘明、石田裕子、石塚航、石原孝、井田崇、伊藤洋、伊東宏樹、井上智美、井上みずき、今田省吾、岩渕翼、上田昇平、上野裕介、内井喜美子、江成広斗、大河原恭祐、太田藍乃、大塚俊之、岡田浩明、岡本朋子、奥田武弘、奥田昇、小野田雄介、片山昇、兼子伸

吾、鎌倉真依、亀井幹夫、香山雅純、河井崇、川口利奈、工藤洋、栗和田隆、黒川紘子、郡麻里、古賀庸憲、小林知里、小林元、小林慶子、小林真、小林誠、小山明日香、近藤洋史、今博計、齋藤隆実、斎藤昌幸、佐藤喜和、酒井聡樹、坂本正樹、崎尾均、佐藤重穂、塩尻かおり、塩寺さとみ、須賀丈、杉浦秀樹、鈴木亮、鈴木俊貴、鈴木紀之、関剛、高木俊、高倉耕一、高嶋敦史、高梨聡、高橋明子、高橋大輔、高橋佑磨、高原輝彦、立石麻紀子、田中嘉成、田邊優貴子、玉木一郎、辻かおる、辻野昌広、辻大和、土屋香織、直江将司、仲澤剛史、中丸麻由子、西原昇吾、西村欣也、西脇亜也、新田梢、橋本啓史、長谷川元洋、畑啓生、原慶太郎、原野智広、比嘉基紀、日室千尋、深澤遊、福島慶太郎、藤林恵、星崎和彦、牧野崇司、松田陽介、三浦収、三木直子、道前洋史、南佳典、三宅崇、持田浩治、森さやか、森口紗千子、森田健太郎、森豊彦、山下聡、山本俊昭、横井智之、横川昌史、吉川徹朗、吉原佑、米倉竜次、米谷衣代、若松伸彦、和田哲、渡邊修

(敬称は略させていただきました。また、このほか 11 名の方が匿名を希望されました。)

*また、以下に今年度から正式に部会化された高校生ポスター賞の審査をしてくださった皆さんのお名前を記して、あらためてお礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。

西脇亜也、山村靖夫、広瀬祐司、平山大輔、丑丸敦史、嶋田正和、山浦悠一、亀田 佳代子、山下雅幸、中井咲織、浅見崇比呂、宮崎祐子、山尾僚、源利文、東樹宏和、片山昇

(敬称は略させていただきました。)

記 事

I. 日本生態学会大会総会（2013年3月9日、参加者約150名）および全国委員会、各種委員会において報告・承認・決議された事項

A. 報告事項

1. 事務局報告

a. 庶務報告（2012年4月～2013年2月）

1. 文部科学省より平成24年度科研費（公開講演会）の内定通知があった（1,300,000円）（4月4日）
2. 日本学術振興会へ平成23年度科研費（出版助成金）実績報告書を送付した（4月4日）
3. 文部科学省へ平成23年度科研費（公開講演会）実績報告書を送付した（4月16日）
4. 2014年に中四国地区で行われる大会は広島国際会議場（期間：2014年3月14日～18日）で行われることが全国委員により承認された（4月16日）
5. 日本学術振興会より平成24年度科研費（出版助成金）の内定通知があった（6,800,000円）（4月25日）
6. 常任委員候補巖佐庸氏が全国委員により承認された（5月14日）
7. 生態系管理委員の継続が全国委員により承認された（5月14日）
8. 日本生態学会奨励賞（鈴木賞）の新設に伴う会則改正が全国委員により承認された（6月6日）
9. カナダの実験湖沼群閉鎖問題についてカナダ首相あてに会長名で要望書を送った（6月18日）
10. 第17回生態学琵琶湖賞の応募を開始した（7月18日）
11. 日本生態学会事務局就業規則の改訂を行った（10月1日）
12. 京都にて60周年記念座談会を行った（参加の先生方：川那部・小野・黒岩・奥富・只木）（10月5日）
13. 常任委員候補大手信人氏が全国委員により承認された（10月18日）
14. 2013年大会発表者への新規入会について期日延長の対応を行った（10月26日）
15. 独立行政法人大学評価・学位授与機構へ機関別認証評価委員会専門委員候補として6名を推薦した（10月26日）
16. 収入の少ない若手会員への措置について2013年分を締切った（申請者4名）（10月31日）
17. 生態学会ウェブサイトのデザインを全面的に更新した（11月5日）
18. 鹿島学術振興財団研究助成候補者として1名を学会推薦した（11月7日）
19. 文部科学省に平成25年度科研費（研究成果公開発表）計画調査など応募書類一式を送付した（11月12日）
20. 日本学術振興機構へ平成25年度科研費（国際情報発信強化A）計画調査など応募書類一式を送付した（11月15日）
21. 学会賞選考委員会に推薦された宮地賞・大島賞・奨

励賞（鈴木賞）候補者が全国委員会にて承認された（11月18日）

22. 2013年会費請求を行った（12月11-13日）
23. 生態誌次期編集長候補の古賀庸憲氏が全国委員会にて承認された（12月20日）
24. 「ABC会員制度の廃止」に伴う会則改正案が全国委員会にて承認された（12月28日）
25. 自然保護専門委員会より提案の「中池見湿地への新幹線敷設計画に対する要望書」が全国委員会で承認され3月の総会に提案することになった（12月28日）
26. 日本学術振興会に平成24年度科研費・学術定期刊行物状況報告書を送付した（1月11日）
27. 山田学術振興財団研究援助候補者として1名を学会推薦した（2月21日）
28. 京都の生態学会事務局にて、法人化に向けての打合せを行政書士を交えて行った（2月26日）

* 他、各種集会へ後援・協賛の名義使用承認7件、論文・図等の転載7件

b. 2012年度学会誌発行状況・会員数・会費納入率および雑誌不要者数変遷

(1) 学会誌発行部数および配本内訳(2012年12月末現在) 日本生態学会誌 62 巻

	1 号	2 号	3 号
発行部数	3130	3200	3350
配本部数	3130	3149	3137
残部数	0	51	213

保全生態学研究 16 巻

	1 号	2 号
発行部数	1400	1500
配本部数	1400	1471
残部数	0	29

Ecological Research Vol.27

	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6
発行部数	3180	2900	2920	2950	2960	2960
配本部数	2888	2900	2920	2915	2910	2916
残部数	292	0	0	35	50	44

配本内訳

	日本生態学会誌		Ecological Research		保全生態学研究	
	62 巻 3 号		Vol.27 No.6		17 巻 2 号	
	配本冊数	未配本冊数	配本冊数	未配本冊数	配本冊数	未配本冊数
一般会員	2241	40	2114	39	1106	21
学生会員	648	77	624	77	275	15
団体	106	2	106	2	24	1
国外個人会員	32	16	30	16	4	1
賛助	0	0	0	0	0	0
小計	3027	135	2874	134	1409	38
名誉会員	4	0	4	0	4	0
寄贈交換	58	0	38	0	55	0
購読	48	0	0	0	3	0
小計	110	0	42	0	62	0
合計	3137	135	2916	134	1471	38

(2) 会員数

	2011 年 12 月末現在							2012 年 12 月末現在						
	一般A	一般B	一般C	学生A	学生B	学生C	合計	一般A	一般B	一般C	学生A	学生B	学生C	合計
北海道	190	76	17	116	33	1	433	178	72	18	107	32	0	407
東北	132	41	10	76	14	4	277	128	44	12	65	12	4	265
関東	658	335	80	302	67	8	1450	649	349	80	280	79	9	1446
中部	241	143	36	136	39	2	597	249	151	33	130	34	2	599
近畿	303	168	28	169	56	6	730	319	174	28	176	68	10	775
中四国	142	71	10	73	18	4	318	143	71	10	51	22	5	302
九州	172	65	21	61	15	2	336	166	66	19	65	13	0	329
小計	1838	899	202	933	242	27	4141	1832	927	200	874	260	30	4123
団体				A 90	B 21	C 5	116				A 87	B 22	C 4	113
国外一般							52							51
賛助							1							0
名誉							4							4
小計							173							168
合計							4314							4291

(3) 会費納入率（各年 12 月末現在）

	2011 年		2012 年	
	一般	学生	一般	学生
北海道	95.4	88.0	97.8	72.7
東北	91.8	71.1	95.1	87.7
関東	92.6	73.5	94.2	80.4
中部	94.3	80.8	94.2	79.5
近畿	93.6	81.4	94.2	86.2
中四国	91.2	71.6	94.2	82.1
九州	93.0	70.5	93.2	83.3
平均率	93.1	76.7	94.7	81.7

(4) 雑誌不要者数変遷（各年 12 月末）

年	一般					学生				
	AB 会員数	生態誌不要	ER 不要	AB 会員数	生態誌不要	ER 不要	AB 会員数	生態誌不要	ER 不要	AB 会員数
2008	2725	107	4%	146	5%	1021	80	8%	85	8%
2009	2740	171	6%	215	8%	1061	148	14%	157	15%
2010	2759	224	8%	288	10%	1122	179	16%	192	17%
2011	2738	371	14%	478	17%	1175	342	29%	364	31%
2012	2760	479	17%	607	22%	1135	410	36%	434	38%
2013*	2661	506	19%	645	24%	1083	459	42%	487	45%

* 2013 年は 2/19 のデータ

c. 会計報告（2012 年 3 月～2013 年 2 月）

1. シュプリングァーへ 2012 年 1・2 号分の出版費として 5,344,500 円を支払った（3 月 30 日）
2. 第 16 回宮地賞 3 名および第 5 回大島賞 2 名の受賞者へ賞金 10 万円ずつを送金した（4 月 3 日）
3. 各地区会へ 2010 年後期分の地区会費と地区還元金を支払った（4 月 25 日）
4. シュプリングァーより 2011 年度売上還元金として 1,215,000 円及び ER 編集事務費用 1,665,000 円の入金があった（4 月 25 日）
5. 土倉事務所へ生態誌 62 巻 1 号印刷代として 1,423,055 円を支払った（5 月 2 日）
6. 鈴木基金口座を作成し寄付金 500 万円を入金した（6 月 21 日）
7. ESJ59 および EAFES5 の残金として 4,663,314 円の入金があった（7 月 19 日）

8. ESJ59 大会還元金として近畿地区会に 50 万円を送金した（8 月 2 日）
9. 土倉事務所へ保全生態学研究 17-1 印刷費として 1,176,000 円を支払った（8 月 21 日）
10. 2012 年会費の再々請求 657 通を送付した（9 月 10・11 日）
11. 土倉事務所へ生態誌 62-2 印刷費として 2,318,400 円を支払った（9 月 19 日）
12. 東京化学同人より「生態学入門 2 版」印税として 598,896 円が振り込まれた（9 月 25 日）
13. 事務局員の退職給付金を支出した（10 月 1 日）
14. 各地区会へ 2012 年前期分の地区会費と地区還元金を支払った（11 月 9-19 日）
15. みずほファクターの口座引落しにより 472 名分の次年度会費 5,040,145 円の入金があった（12 月 12 日）
16. INTECOL 年会費 1 年（2012 年）分として 350,263 円を送金した（12 月 19 日）
17. 土倉事務所へ生態誌 62 巻 3 号印刷代として 1,494,938 円を支払った（12 月 20 日）
18. 土倉事務所へ保全誌 16 巻 2 号印刷代として 1,260,000 円を支払った（12 月 20 日）
19. シュプリングァーへ 2012 年 3-6 号分の出版費として 10,652,075 円を支払った（12 月 26・1 月 4 日）
20. (株) アライブネットへレンタルサーバ年間利用料として 398,000 円を支払った（1 月 10 日）
21. 各地区へ 2012 年後期分の地区会費および地区還元金を支払った（1 月 25 日・2 月 8 日）
22. 2012 年度の会計監査が学会事務局で行なわれ、会計は適正に行なわれたことが確認された（2 月 7 日）

2. 大会企画委員会

a. 静岡大会概況

- ・公式集会数 37 件（60 周年記念シンポジウム 1、シンポジウム 13、フォーラム 6、企画集会 17）
- シンポジウム旅費招待講演者
- 学会招聘 1 件 Steeve Côté (Laval University, Canada)
- ER シンポジウム招聘（試行）1 件 Hans Cornelissen (オランダ・Vu 大学・教授)
- ・非公式集会数（自由集会）36 件
- ・一般講演数 1105 件 口頭発表 211 ポスター発表 894
- 高校生ポスター発表 26
- ・参加申し込み者数 1631 人、懇親会参加 641 件
- ・要旨集購入申込 259 件 問い合わせ件数 116 件

b. 今期に実施したこと

- ・高校生ポスター部会の設置
- ・ポスターは 3 月 6 日（火）と 7 日（水）に実施。ポスター賞対象者は 3 月 6 日（火）のみ。
- ・ポスター賞はいったん以前の形態に戻し、将来計画委員会のアンケート結果をもとに検討することになった→将来計画委員会との議論の結果をうけて広島大会提案、次期企画委員会で検討してもらう。
- ・高校生ポスターは、一般ポスター発表と日時をわけ、3 月 9 日（土）に実施（高校生のカレンダーとしては、多少困った日程とのことであった）

- ・60周年記念シンポジウム「日本生態学会の21世紀の歩みとロードマップの提示」を開催
- ・学部学生以下の参加費無料化：当日参加のみ、学生証提示で認める
- ・非会員が講演・企画を希望する場合は、2012年10月19日までに2013年の入会を申し込むとともに、10月24日までに2013年学会費を納入して学会員となる必要がある→周知不足により、10月31日まで延長。ただ、企画委員会（特に運営部会）の手作業を大幅に軽減した。団体会員を撥ねるシステムも以後追加。
- ・企画集会和自由集会の申し込み期限を、一般講演締め切りと一元化（2012.11.08）→企画委員会の省力化に有効に働いた。
- ・フォーラムの扱い：できるだけフォーラム間の重複を避ける方針で行った。
- ・似たような内容の集会の重複開催の回避：自動処理化をシンボ部会が試行した。
- ・大会参加（発表）に関する招待状（invitation letter）について：学会長名で発行（事務局）
託児所に加え、予約不要で自由に利用できる「ファミリー休憩室」を設けることになった。など

c. 広島（中四国地区）大会（2013年度）準備状況

検討事項

- ・各種行事の参加資格（非会員の講演に関して）
- ・発表のための入会期限について
- ・英語口頭発表賞の創設
- ・招聘シンポジウムの英文誌との連携
- ・英語による大会参加案内の充実、日本語による大会参加案内の簡素化
- ・ポスター賞審査の負担軽減
- ・高校生ポスター部会の体制整備（ポスター部会との連携強化）

d. 九州大会（2014年度）準備状況

（文責：陀安一郎）

3. Ecological Research 刊行協議会

a. Ecological Research の国際情報発信強化（科研費申請）について

これまで「出版助成」だった科研費の枠組みが「国際情報発信強化」に大きく変更された。冊子体の発行は助成されなくなる。採択結果通知は5月末ごろの予定。Ecological Research 将来計画 WG を設置して、今後の対応の検討を開始する。

b. Vol.27（2012発行）について

No	頁数	掲載論文数		分野内訳*			
		合計	国外	Z	P	A	O
1	244	27	18	7	15	3	2
2	221	24	16	12	10	1	1
3	171	18	11	6	9	0	3
4	169	17	15	3	10	1	3
5	143	18	14	4	12	2	0
6	108	12	6	4	7	1	0
計	1056	116	80	36	63	8	9

※分野：Z = 動物（陸上）、P = 植物（陸上）、A = 水界（海洋 + 陸水）、O = その他（理論等）

c. 年間投稿数の推移（各年度は4月1日～3月31日）

年度	投稿数*1	通常論文
2002	166	166
2003	185	169
2004	223	209
2005	341	330
2006	416	362
2007	418	416
2008	439	422
2009	469	456
2010	443	435
2011	442	431

*1 特別論文を含む

日本人の投稿数：87（2009）、76（2010）、63（2011）、73（2012）

d. 編集状況

投稿から最初の Decision までの日数

Year	Days
2010	52.5
2011	52.7
2012	46.9

判定までの日数と受理率の推移

Year	2009	2010	2011	2012
Total Submitted	461	472	446	438
Total Decision	410	475	417	426
Accept	100	108	120	97
Reject	310	367	297	329
Acceptance Rate	24%	23%	29%	23%

Impact factor と生態分野雑誌でのランキング

Year	Impact factor	5-year Impact factor	in ecology journals	
			rank	rank%
2011	1.565	1.705	80/131	61
2010	1.279	1.671	89/129	69
2009	1.485	1.623	71/127	57
2008	1.206	1.404	77/124	62
2007	1.053	1.442	77/116	66

e. Ecological Research 冊子体不要者の推移

年	一 般			学 生			一般+学生		
	会員数	不要者	%	会員数	不要者	%	会員数	不要者	%
2010	2756	288	10	1121	192	17	3877	480	12
2011	2738	478	17	1175	364	31	3913	842	22
2012	2760	607	22	1135	434	38	3895	1041	27

f. Ecological Research Award 2012 について

受賞論文 (4 編)

- 1) Britas Klemens Eriksson, Anja Rubach, Jurgen Batsleer, Helmut Hillebrand
Cascading predator control interacts with productivity to determine the trophic level of biomass accumulation in a benthic food web. Ecological Research, Volume 27 (2012), Issue 1, p. 203-210.
- 2) Yuki Okajima, Haruhiko Taneda, Ko Noguchi, Ichiro Terashima
Optimum leaf size predicted by a novel leaf energy balance model incorporating dependencies of photosynthesis on light and temperature. Ecological Research, Volume 27 (2012), Issue 2, p. 333-346.
- 3) Narumi K. Tsugeki, Tetsuro Agusa, Shingo Ueda, Michinobu Kuwae, Hirotaka Oda, Shinsuke Tababe, Yukinori Tani, Kazuhiro Toyoda, Wa-lin Wang
Eutrophication of mountain lakes in Japan due to increasing deposition of anthropogenically produced dust. Ecological Research, Volume 27 (2012), Issue 6, p. 1041-1052.
- 4) Daisuke Hirayama, Toshio Fujii, Satoshi Nanami, Akira Itoh, Takuo Yamakura
Two-year cycles of synchronous acorn and leaf production in biennial-fruiting evergreen oaks of subgenus *Cyclobalanopsis* (*Quercus*, Fagaceae). Ecological Research, Volume 27 (2012), Issue 6, p. 1059-1068.
(文責：可知直毅)

4. 日本生態学会誌刊行協議会

日時：平成 25 年 (2013) 年 3 月 5 日 (火) 14:00 ~ 16:00

場所：グランシップ (静岡県コンベンションアーツセンター) 委員会室 2 (会議室 905)

a. 報告事項

- ①生態学会誌次期委員長 (2014 年 1 月～)：和歌山大の古賀庸憲氏で決定
- ②ホームページの改訂
学会のホームページの改訂に合わせて、生態学会誌のページも改善した (表紙の写真集、編集委員長からのページの新設など)。今年中に、生態学会誌の歴史 (歴代委員、委員長リストなど) も作る予定
- ③生態学会誌の各ページに学会のロゴを入れる。
- ④出状況版

i) 投稿、審査状況 (2013 年 2 月 13 日現在)

年	原著 受付	総説 受付	原著・総説			特集			学術 情報	連載
			受理	却下	審査中	受付	受理	審査中		
2013	3	1	0	1	3	0	0	0	2	2
2012	1	2	1	0	2	4 (22 編)	3 (15)	1	2	6
2011	5	3	4	4	0	3 (24 編)	3 (23)	0	0	8
2010	7	8	9	6	0	6 (40 編)	6 (40)	0	3	8
2009	3	4	7	0	0	2 (19 編)	2 (19)	0	1	8

ii) 刊行状況

63 巻 (2013 年)

号	原著	総説	特集	学術 情報	連載	その他・記事	合計	頁数
1	1	0	2 (12 編)	2	2	0	17	未定

62 巻 (2012 年)

号	原著	総説	特集	学術 情報	連載	その他・記事	合計	頁数
1	2	1	1 (8 編)	0	3	0	14	110
2	3	0	2 (8+8 編)	1	2	0	22	202
3	0	0	2 (5+5 編)	1	2	0	13	108

61 巻 (2011 年)

号	原著	総説	特集	学術 情報	連載	その他・記事	合計	頁数
1	0	2	2 (6+5 編)	0	2	1	16	122
2	1	1	1 (9 編)	0	3	0	14	128
3	0	2	1 (6 編)	0	2	2	12	104

⑤ CiNii からの論文閲覧状況 (Full text PDF のページを閲覧した数)

雑誌	2007	2008	2009	2010	2011	2012	総頁数
植物生態学会報	420	816	1,040	983	717	887	1,568
日本生態学会誌	11,428	38,305	45,340	44,288	45,878	50,171	50,093
保全生態学研究	1,249	8,306	10,307	13,394	18,325	19,766	15,795
合計	13,097	47,427	56,687	58,665	64,920	70,824	67,456
保全還元金 (円)	120,827	172,618	159,151	160,688	148,497		

* 保全誌は、発行後 2 年間のアクセスが有料。生態学会誌は、初めから無料。

Ecological Research 2011 年のダウンロード総数 113,084 件

b. 議題

①日本生態学会誌投稿規定 の著作権に関する規定の改訂

現行の投稿規定：

著作権 (複製権、公衆送信権) 著作権 (複製権、公衆送信権) は日本生態学会に帰属する。図表の転載は学会の許可を受けること。

ホームページ掲載の (会員向け) 「本学会の学会誌に掲載された論文の大学図書館などへの再掲載 (機関リポジ

トリ)に関するお知らせ」(以下に一部抽出)

リポジトリ登録の依頼を受けた場合、編集事務局に最終的に提出した論文原稿をリポジトリ登録用原稿として提出してください。著作権は日本生態学会にあるので、論文の内容はリポジトリとして公開が可能です。学会誌の体裁については出版社が作ったものであるため、そのままの体裁では公開できません。したがって、機関リポジトリとして提出する原稿には、**学会誌の体裁ごとデジタル化されているものは絶対に使用しないようお願いいたします。** < <http://www.esj.ne.jp/esj/Info/Repository/member.html> >

(2007年5月に当時の庶務幹事津田智先生(岐阜大)が文案を作り、全国委員会で承認。)

改定案

著作権(複製権、公衆送信権)の次に、以下の新しい項を追加する。

著者による著作物の利用 著者個人又は著者が所属する法人若しくは団体のWebサイトにおいて、自身の記事を掲載する場合には(機関リポジトリへの保存及び公開を含む)、CiNiiの当該記事へのリンクをすることが望ましいが、PDFそのものを掲載する必要がある場合には、学会(編集委員会)に通知するものとする。なお、利用にあたっては出典(本誌誌名、掲載巻号、ページ)を明記する。

ホームページ掲載の(会員向け)「**本学会の学会誌に掲載された論文の大学図書館などへの再掲載(機関リポジトリ)に関するお知らせ**」は、Ecological Research、保全誌だけに適応するものとし、生態学会誌については、うえの規定と整合する文章を入れる。

改訂提案理由

現在CiNiiで全文公開(学会誌の体裁のPDF)を誰でも自由にダウンロードでき、年に約5万件閲覧されている。農林水産研究情報センターのポータルサイト「AGROPEDIA(アグロペディア)」([URL:http://www.agropedia.affrc.go.jp/top](http://www.agropedia.affrc.go.jp/top))へ生態誌の抄録及び全文の公開承諾申請が10月頃に来て、事務局としては承諾した。実質的には学会誌の体裁になったPDFが、学会誌とは別に自由に流布しているが、生態学会誌の投稿規程では、著者が個人のホームページ等でPDFを公開することは、規定違反になる。

また最近大学図書館などで所属研究者の業績を再掲載(リポジトリ)することがよく行われるようになったが、生態学会では上述のホームページの記述のように、発行している3種の雑誌の体裁のままでリポジトリすることを禁じている。Ecological Researchについては、Springerが体裁を揃え、有料で全文公開しているので、それを無料で公開することを禁ずることは、当然と思われる。しかし、生態学会誌は、CiNiiから誰でも無料で印刷体裁の論文をダウンロードできるので、別の扱いが適当と思われる。

ただし、どの程度PDFがダウンロードされているかを、学会として把握しておくためには、それぞれがPDFを置くよりも、CiNiiからダウンロードするようにリンクを設定してもらうことが望ましい。

(文責:鈴木英治)

5. 保全生態学研究刊行協議会

2013年3月5日11:45～

場所: グランシップ 会議室 907

出席者: 角野康郎(編集委員長)、西廣淳(編集幹事)、三橋弘宗(編集幹事)、角谷拓、河口洋一、館野正樹、中越信和、増田理子、山本智子、湯本貴和、横溝裕行、橋口陽子(編集事務)、天野貴子(土倉事務所)

a. 報告事項

① 17巻(2012)の発行状況

1号(5月)原著6、調査報告1、実践報告1、総説3、意見2 計13編

2号(11月)原著10、調査報告2、実践報告1、意見1、計13編

② 投稿・編集状況

2012年投稿状況

	原著	調査報告	実践報告	総説	保全情報	意見	合計
投稿総数	21	5	1	2	1	1	31
受理	13	4	1	0	0	1	19
却下・取下げ	3	1	0	2	1	0	7
審査中	5	0	0	0	0	0	5

	原著	調査報告	実践報告	総説	保全情報	意見	合計
動物	6	4	0	0	0	0	10
植物	11	1	1	1	0	0	14
その他	4	0	0	1	1	0	6
投稿総数	21	5	1	2	1	0	30

2011年新規投稿数32編: 受理25編、却下・取り下げ7編

2010年新規投稿数24編: 受理20編、却下・取り下げ4編

2009年新規投稿数37編: 受理27編、却下・取り下げ10編

③ 18巻1号編集状況

原著7 + a、調査報告2 → 順次入校中 → 5月発行予定

b. 審議事項

① 投稿促進の取り組み

② オープンアクセスの是非

③ C会員制度が廃止された場合の保全生態誌への影響について

(文責: 角野康郎)

6. 自然保護専門委員会

日時: 2013年3月5日(火) 11:45～13:45

場所: グランシップ(静岡コンベンションアーツセンター) 委員会室1(会議室1202)

出席委員: 現委員19名・次期委員予定者2名: 露崎、紺野、竹原、川上、吉田、井田、和田、井上、増澤、竹門、加藤、清水、横畑、陶山、吉田、竹中、村上、立川、安溪、(次期委員予定者) 金子、中井

a. 審議および承認事項

① 2012年度活動費支出(1～12月)報告および2013年度活動費予算

1) 2012年度活動費 60,000円(上関アフターケア英文パンフレット印刷費)

2) 2013年度予算 60万円(アフターケア活動費48万円、部会および役員旅費・事務等12万円)

・2013年度予算のうち上関アフターケア旅費(上関神

社地訴訟差し戻し控訴審へむけた情報交換：安溪アフターケア委員）1万6,800円は精算済み

②要望書および意見書提出への取り組み

1) 環境省「種の保存法」改正にあたっての意見書提出について【資料①】

⇒吉田委員より経緯と現状説明があり、審議の結果、原案修正後、意見書を提出することが承認された。

2) 千葉県印西市の草地環境「そうふけっぱら」の自然の保全を求める要望書について

⇒吉田委員より経緯と現状説明があり、審議の結果、関東地区会で要望書提出を検討していただき、それでも問題の解決が困難な場合には自然保護専門委員会でも再度要望書提出を検討する。

3) 沖縄県名護市辺野古・大浦湾の米軍基地飛行場建設に伴う埋め立て中止を求める要望書提出について

⇒加藤副委員長より経緯と現状説明があり、審議の結果、総会決議を目指して全国委員会に諮ることとなった。

b. 報告事項

①自然保護専門委員会の活動報告（2012年3月～2013年3月）

2012年4月

生物多様性国家戦略への提言を環境省野生生物課宛に外来種検討部会の村上委員より送付

2013年1月

「中池見湿地への新幹線敷設計画に対して、新たな環境影響評価調査を求める要望書」を生態学会自然保護専門委員会会長名で、環境省自然環境局野生生物課、国土交通省鉄道局施設課、福井県環境部自然環境課、鉄道・運輸機構鉄道建設本部、敦賀市環境課ほか報道機関に送付。同時に、中池見のアフターケア委員会がスタート。

2013年3月

日本ベントス学会公開シンポジウム『有明海・諫早湾（いさはやわん）：日本初の大規模な環境復元の意義』（於：長崎原爆資料館平和会館ホール）を後援

②要望書の提出

中池見湿地への新幹線敷設計画に対して、新たな環境影響評価調査を求める要望書

③問題検討作業部会報告（外来種検討作業部会・村上部会長）

1) 愛知目標達成のための侵略的外来種リスト作成について

2) 外来種被害防止行動計画策定について

3) 外来生物ハンドブックについて

④アフターケア委員会報告（カッコ内は報告者）

・魚釣島問題アフターケア報告（横畑委員）

・上関アフターケア報告（安溪委員）

・淀川問題検討委員会（村上委員）

・石狩海岸風車アフターケア報告（紺野委員）

・中池見湿地アフターケア報告（加藤副委員長）

⑤各担当委員からの報告（カッコ内は報告者）

・環境省レッドリスト改定における寄生生物指定について（横畑委員）

・安平川湿原大規模フェンとその周辺の自然をめぐる北海道地区会の動向（北海道・紺野委員）

⇒2012年8月9日に北海道地区会より「安平川湿原大規模フェンの保全のための要望書」を提出

・FIT後のエネルギー関連の報告（エネルギー・安溪委員）

・亀岡のアユモドキ生息地の保護を求める要望書提出について（近畿地区・中井次期委員）

⇒2013年3月12日に近畿地区会長名で提出予定

【資料①】

絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）改正に対する意見（案）

2011年12月22日、本学会は貴省のパブリックコメントに対し、「絶滅のおそれのある野生生物の保全施策に関する意見」（別添）を提出し、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（以下、種の保存法）」の国内希少野生動植物種の指定推進、国としての調査研究・モニタリング体制の充実などを求めました。

しかし、今回の種の保存法改正には、国際希少野生動植物種に関する規制強化が盛り込まれているのみであり、本学会が2011年に提案した保全施策とりわけ国内希少野生動植物種の指定、保全施策の推進に関する内容は含まれていません。国内希少野生動植物の保全は、「絶滅のおそれのある野生生物種の保全戦略」によって対処すると聞きますが、法改正が必要な事項も存在します。

本学会自然保護専門委員会は、改めて以下の点について強調するとともに、法改正が必要なものについては改正を検討するよう求めます。

1. 種の保存法の国内希少野生動植物種の指定推進

環境省版レッドリストに掲載された3,597種の絶滅のおそれのある野生生物種のうち、種の保存法の国内希少野生動植物種に指定されているのは、わずか90種に過ぎない。これは、環境大臣が中央環境審議会に諮問した生物種の指定を、審議会が指定すべきかどうか答申するという行政主導の指定手続きをとっているためである。環境大臣が諮問した生物種のみを審議するのではなく、科学的見地から、絶滅のおそれの高い種、保全施策を積極的にとるべき種を選定し、環境大臣に指定を具申する権限を持った科学委員会を設置して、国内希少野生動植物種の指定を推進すべきである。

2. 沿岸・海洋の絶滅危惧種の保全施策の推進

種の保存法の国内希少野生動植物種の指定は、陸上・陸水の生息生育する生物種に限定されており、沿岸・海洋に生息生育する生物種は、一種たりとも指定されていない。これは、1993年4月に水産庁長官と環境庁自然保護局長との間に結ばれた覚書に基づいているが、沿岸・海洋の生物種に絶滅危惧種がないわけではなく、むしろ沿岸・海域（とくに河口・砂浜・干潟・藻場・サンゴ礁など）にこそ絶滅危惧種が集中している。環境省は、沿岸・海洋に生息生育する野生生物種のレッドデータブックの作成を急ぐとともに、水産庁との覚書を見直し、沿岸・海洋に生息生育する絶滅危惧種の保全施策を推進すべきである。

3. 里地里山の絶滅危惧種の保全施策の推進

陸上・陸水の野生生物種の危機要因は、開発、捕獲採取のみならず、草地・雑木林などの里地の遷移の進行、中山間地からの農業の撤退などに起因するものが多い。現行の種の保存法は、規制的手法による保全手法に依存しているが、英国の環境スチュワードシップ制度のように、農林水産業や市民活動に対する奨励的措置を種の保存法にも位置づけることによって、多様な保全施策がとれるようにすべきである。また、里地里山の絶滅危惧種に対しては、種ごとの保護増殖計画を策定するよりはむしろ、水田、ため池、雑木林などハビタットごとの保護回復計画を策定することがふさわしい。このような生物種群を、(仮称)第2種国内希少野生動植物種として選定し、規制の措置よりも生息生育地管理により重点をおいた施策がとれるよう、種の保存法を改正すべきである。

4. 絶滅危惧種の調査研究・モニタリング体制の充実

レッドデータブックに記載された野生動植物の現状把握やモニタリング体制は、地域の研究者へのアンケート調査などが中心であり、現地調査に基づく現状把握は不十分である。絶滅危惧種の調査研究・モニタリングは、地域の研究者やNGOなどに依存しており、国としての調査研究・モニタリング体制は、米国の魚類野生生物局などと比較して極めて貧弱である。生物多様性条約愛知目標12「2020年までに、既知の絶滅危惧種の絶滅及び減少が防止され、また特に減少している種の保全状況が維持や改善」の達成のためにも、国立環境研究所等における研究者の増員、環境事務所におけるアクティビングレンジャーの増員等をはかるべきである。

(3月15日環境大臣宛に提出した)

(文責：矢原徹一)

7. 外来種検討作業部会

開催日：2013年3月5日9時半～11時半

場所：静岡県コンベンションツアースセンター 907 会議室

出席者：村上、石田、大河内、五箇、立川、常田、中井、増沢、横畑

a. 報告＆審議事項

1) 愛知目標達成のための侵略的外来種リスト作成について

昨年度まで侵略的外来種リスト作成会議の内容を愛知目標達成のための侵略的外来種リスト作成会議に変更して24年度に2回の会議が開催された。その他に植物については種類数が多く利用に係る種類も多いことから、別途植物ワーキンググループ会議が平成2回開催され、その審議内容が前者の委員会に報告されるとともに審議資料に含まれている。

今年度は侵略的外来種リスト作成の基本方針の素案ができて、この方針に基づいて今後のリスト掲載種の選定が行われることとなっている。部会ではこの内容を紹介すると共に、この妥当性についても検討を行った。とくに問題となったことは在来種の分布域内に別の遺伝形質をもつ同種個体の導入に関することと、感染症や寄生生物で人に対する影響を及ぼす種の扱い等である。また、カテゴリー区分では、侵入定着段階による段階分けだけ

ではなく、対策優先度の段階との組み合わせで考えるべきである等のことである。

2) 外来種被害防止行動計画策定について

前年度まで外来種防除戦略策定会議の内容を表記の内容に変更して、平成24年に2回開催された。

この会議は外来種被害防止行動計画素案の内容に沿って、第2章第1節1の普及啓発と教育、2. 外来種対策の優先度の考え方、3節侵略的外来種の導入の防止(1)意図的に導入される外来種の適正管理、5の国内外来種への対応、第2章第1節7の情報基盤の構築及び調査研究の推進等を取り上げ、提示された論点について検討を行った。議論となった主なことは、調査・研究に関して今後外来種対策に必要な調査や研究を系統的に項目だてして推進する必要性や、リスト作成会議との連携についてもっと触れる必要があること等のことである。

以上の2件については今後の外来種管理にとって大変重要なので、素案ができた段階で会議を開催し、要望書を提出することとした。

3) 外来生物ハンドブックについて

現在、愛知目標の達成のための取り組みが行われつつあり、外来種問題を取り囲む状況は大変流動的である。日本生態学会として、今回出版する本の出版目的の明確化が必要で、将来侵略的外来種管理の規範となるような本を作るために、現在の章構成なども再検討の必要がある。当面上記リスト作成と被害防止行動計画の策定に協力しながら、継続して原案の作成に当たることとする。

(文責：村上興正)

8. 将来計画専門委員会

場所：グランシップ(静岡県コンベンションアーツセンター) 委員会室2(会議室905室)

出席者：辻和希(委員長)、野田隆史、仲岡雅裕、奥田昇、中丸麻由子、松木佐和子、粕谷英一、五箇公一、松田裕之(オブザーバー会長)、陶山佳久(幹事長オブザーバー)

欠席者(敬称略)：巖佐庸、酒井章子、田中健太、佐竹暁子

a. 審議事項

①大会での英語使用に関するアンケート結果

- ・「大会での英語発表が訓練になる」とする意見が全体の76%。英語を理由にポスター賞応募をやめた人でさえ68%が同意見だった。
- ・一方、言語がなんであれコミュニケーションの円滑化を図るべきであるという意見が大勢(英語だと日本人同士で円滑にできない、日本語だけだと留学生等が議論に参加できない)。

②上記結果に基づく提案

- 1) たとえばポスター賞の応募作の英語表記義務などをインセンティブに英語使用の推進を継続してほしい。
- ・ポスター紙面は基本英語、ただし和英併記にしてもよい。英文ポスターに縮小版日本語バージョン用意するなど各自の工夫を歓迎する。説明は聞き手に応じ日本語でも英語でもよいとはどうか。
- ・口頭説明は採点には含めない(省力化のため←本問題

は企画委員会等と密な連携が必要)。

- 2) 英語発表を対象にした口頭発表賞を設ける。
 - ・位置付け：英語による議論の訓練の場を大会が提供することで、とくに若手研究者の国際的発信力を高めることが目的。
- ③その他、ロードマップ、留学と海外就職に関するフォーラム開催、外国人大会参加者へのインセンティブ、外国人学会員によるモニタリングなど生態学全体（大会、学会運営、学会誌）のトータルな国際化・発信力強化に向けた施策を議論した。

会員への呼びかけ

学振PD／DCへ積極的に応募してください（指導教員と学生自身に呼びかけたい）。無理だと決めつけないで。沢山応募すればあなたを含め生態学会員が採択されるチャンスが必ず上がります！

（文責：辻和希）

9. 生態教育専門委員会

2012年9月29日13:00～9月30日12:00 大阪市立自然史博物館 会議室

2013年3月5日 グランシップ（静岡県コンベンションアーツセンター）委員会室4（会議室907）14:00～16:00

a. 2012年春に発刊された生態学入門（第2版）の活用・普及について

大学教育、高大連携などでさらなる普及・活用の活動を進める。

b. 生態学実習ガイドブック

2004年に『生態学入門』、2012年に「生態学入門（第2版）」（新課程の学習指導要領に対応）を編集した。そして、新課程の「生物基礎」、「生物」では生態分野が増加し「探求活動」における観察、実験、実習の役割が増大するなど生態分野にとっての教育情勢は改善方向にある。一方、高校現場などから授業で使える生態学教材を望む声が増えつつあることは注意信号である。

そこで「生態学実習ガイドブック（Web版）」計画を立ち上げた。これは実習案を公募し、オンライン（HP）上で編集して行く計画である。実習案は委員会メンバー、MLでチェック後にウェブ公開する予定である。

この計画実現のためには多くの方々の協力が必要であるのでフォーラムやニュースレター、MLなどで広く会員内外に参加を呼びかけたい。

c. 生態学教育フォーラム（2013年3月9日）

タイトル：生態学実習ガイドブック（Web版）をつくらう！

略称：生態学実習ガイド本

主催委員会：生態学教育専門委員会

- *「生態学実習ガイドブック（Web版）の趣旨」西脇亜也（宮崎大学農学部）
- *「生態の授業を面白くするには？」中井咲織（立命館宇治中学・高等学校）
- *「『森の健康診断』を活用した生態学の野外実習－健康な森が健康な生徒を育てる？」中村羊大（愛知県立豊田東高等学校）

*「教育学部での生態実習教材の開発と実践」平山大輔（三重大学教育学部）

*「コメント：どんな実習ガイドブックが望まれる？」嶋田正和（東大・総合文化・広域）

*「コメント：生態学実習ガイドブックに期待すること」広瀬祐司（大阪府教育センター）

d. 大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準：生物学（案）に対する委員会意見（概要）

メール会議と委員会での議論の結果、この参照基準では生態学的内容の理解が重要な事項として挙げられていること、そして「生物学を学ぶ上では、観察、実験、実習がきわめて重要な意味を持つ」とする学習方法や評価方法に関する考え方が示されていることは多くの自然史・生態学関係者にとって非常にうれしいことである。しかし、この参照基準では生物の多階層性や複雑性、多様性に関する記述や無生物と生物の区別に関する記述は詳しいのだが、「生物学を学ぶ学生が身に付けるべき基本的な素養」を考える上では「生物の共通性と多様性」に関する記述が必要ではないかという意見が中学校、高等学校の現任教員を含む多くの委員から出された。

学習指導要領解説（高校理科H21）によれば、「生命科学などの科学の急速な進展に伴って変化した内容については、実社会・実生活との関連や、高等学校と大学の接続を円滑にする観点から見直し」が図られた。

それゆえ、「生物学分野の参照基準」についても、高等学校と大学の接続を円滑にする観点から記述内容の改善を願いたい。

生物学全体が複雑系であることを強調しすぎることは「生物学は何でも有り」と言う誤ったメッセージを提示してしまい誤解を与える恐れがある。

ここでは、「学生たちが大学から社会の様々な場に出た際に、力を発揮して活躍できるように」、生物や生物現象が多様であることを踏まえつつも、それらに共通する生物学の基本的な概念や原理・法則を理解する能力、そして共通性と多様性という二つの視点を理解するために、現存している生物は起源を共有しているという生物固有の進化的視点を理解する能力を身に付けることが大切ではないか。さらに、学生自らがねらいを明確にした観察、実験などを行うことで、生物学的に探究する能力を身に付けることは大学の学士課程において基本的に重要ではないか。健全な生命倫理観、環境倫理観を養成するためにも、これらの検討を願いたい。

（文責：西脇亜也）

10. 生態系管理専門委員会

a. 2012年度活動報告

①第5回 自然再生講習会

日本生態学会 第五回 自然再生講習会

「自然林再生のための森づくり技術と協働マネジメント技術」

2012年10月20-21日 徳島大学工学部

②東北三県への申し入れ

「津波被災地での防潮堤建設にあたっての自然環境への配慮のお願い」（2012年10月26日付）を、岩手県庁、

福島県庁、宮城県庁に提出した。

③震災復興ワークショップ

「自然の恵みを活かす復興に向けて、震災後の環境対策のあり方を考える」

主催：応用生態工学会、日本生態学会

平成 25 年 1 月 16 日 仙台市青年文化センター

b. 2013 年度活動予定

①第 6 回 自然再生講習会

「生きもののブランドで生物多様性・生態系の再生」

広島県世羅町において 2013 年 10 月頃開催予定

②自然再生講習会フォローアップ

麻機遊水地への対応を継続する。

③自然再生ハンドブックの改訂

改訂に向けた議論を開始する。

④「生態系と社会に関する学会間ネットワーク（仮称）」の提案

生態学関連の学会や団体が連携して、災害等の緊急調査時の初動体制や情報プラットフォームを構築し、生物多様性や自然環境保全に関する対応策の提言ができるようにするために関連学会や委員会への呼びかけを進める。

（文責：竹門康弘）

11. 大規模長期生態学専門委員会

参加者：日浦勉（委員長）、鈴木智之、伊東明、黒川紘子、正木隆、柴田英昭、仲岡雅裕、中村誠宏、石田清（オブザーバー）

a. 各ネットワーク・プロジェクト活動報告

- ・JaLTER 執行部交代 代表：日浦勉 副代表：大手信人、奥田昇 情報委員長：三枝信子 科学委員長：村岡裕由 事務局長：榎木勉
- ・CTFS 大面積森林プロット現在 21 カ国 50 サイト。日本サイトからの参加も歓迎するが、資金サポートはなし。
- ・林野庁 4 km メッシュ森林資源モニタリング 今年度中に公開予定（？）
- ・S9-3 植物機能形質データベース 日本主要 300 樹種形質データを分析 5 月中に終了予定。今年アジア地域に注力、生態系機能マップを作る
- ・GLP 2012 年台北オフィス、イギリスにあったオフィスが閉じたため、ヨーロッパオフィス設置。Open Science Meeting 来年 3 月ドイツ開催。
- ・環境省・文科省：津波被災地生態系の長期回復過程モニタリング
- ・Census of Marine Life が 2010 年終了、次期プロジェクト立ち上げ模索中
- ・ニュートネット（草原施肥実験）はアジア地域にはないので、日本からの参加が求められている。

b. 次回広島大会フォーラム企画

ER データペーパーに投稿しよう

話題提供

- ・真板 データペーパーに投稿するには → 生態学会誌に投稿
- ・石原 データペーパーは海外でどのように使われているか

・浦河 データペーパー投稿体験記

・三木？ データベースを使って書く論文

・実際に手を動かして作成体験

（文責：日浦勉）

12. 野外安全管理委員会

出席者：鈴木、粕谷、奥田、北村、飯島、石原

a. 2012 年度活動報告

①野外調査安全管理マニュアル出版準備

生態学会と文誌での出版に向けた原稿を作成した。原稿はほぼ完成したが、版下編集の作業量が膨大なため、脱稿が予定より遅れている。

②2012 年大会でのランチョンセミナー開催

ランチョンセミナー（「野外調査に初めて行く人のための安全講習」）を実施した。安全対策教育を目的としたスライドを示し、安全対策の重要性を訴えた。きわめて若い会員を中心に 60 名ほどの参加があった。

③2013 年大会でのランチョンセミナー

野外調査の初心者を中心とした安全対策啓発のためのランチョンセミナーを企画し、準備を進めた。

b. 2013 年度活動予定

①野外調査安全管理マニュアル出版

生態学会と文誌として出版する。出版予定が遅れている。分担作業の割合を増やすなどして、今年度中に出版する。

②2013 年大会でランチョンセミナー実施

ランチョンセミナー（「野外調査に初めて行く人のための安全講習」）を開催する。また、その投影資料を学会のホームページ上で公開する。

③2014 年大会でのランチョンセミナー実施およびポスター掲示

野外調査の初心者を中心とした安全対策のためのランチョンセミナーおよびポスターと、研究室運営者を対象としたポスターを企画し、14 年大会で開催・展示する。

④事故情報収集のための依頼

所属や近傍の機関などで、野外調査中の事故が起きた場合は、その情報を野外安全管理委員会にご連絡いただければお願いしたい。

（文責：鈴木準一郎）

13. キャリア支援専門委員会

2011 年 3 月 7 日 14 時～16 時 グランシップ静岡 906 号室

委員メンバー：半場、池田、村岡、三宅、坂田、別宮、飯島（オブザーバー）深谷、石塚

a. 生態学会静岡大会での企画について

①ファミリー休憩室

乳幼児や小学生連れの大会参加者向けの「ファミリー休憩室」の設置を大会実行委員会に提案し、設置に協力。子連れでの食事や休憩、授乳などに対応した休憩室として今大会初めての試み。

設置期間：2013 年 3 月 6 日（水）～9 日（土）

開設時間：3月6日～8日 午前9:20～大会プログラム終了時間の10分後、3月9日 午前9:20～午後17:00

場所：静岡県コンベンションアーツセンター（グランシップ静岡）9階907号室

託児室も例年通り設置予定。

②キャリア支援フォーラム

日時：3月9日9:30-12:00

場所：グランシップ（静岡県コンベンションアーツセンター）9階D会場

スケジュール：講演者の方々に30分お話をいただき、10分質疑応答。岸田さん、山根さん、田中さんの経歴紹介はそれぞれ深谷さん、三宅さん、別宮さんが担当。

9:30-9:35 趣旨説明（半場）

9:35-10:15 岸田宗範（環境省九州地方環境事務所）「生態学専攻者が行政官として働く意義：若手職員の視点から」

10:15-10:55 山根明弘（北九州市立自然史・歴史博物館）「市民とともに」

10:55-11:35 田中秀二（京都府立洛北高校）「生物学の王国を出て生物学を広めに行く仕事」

11:35-12:00 総合討論（司会：飯島）

③企業ブース

2012年3月6日～8日に設置。7日12時15分～17時には採用担当者など企業の担当者が来場して説明会を開催。

- ・株式会社リバネス（資料展示）
- ・野生動物保護管理事務所（担当者が来場・学生等との面談）
- ・西日本高速道路株式会社（資料展示）
- ・株式会社日本ヴォーグ社（担当者が来場・学生等との面談）
- ・株式会社エスペックミック（担当者が来場・学生等との面談）
- ・日本環境計測（担当者が来場・学生等との面談）
- ・メイワフォーシス株式会社（担当者が来場・学生等との面談）

b. 2013年度の活動計画（案）

- ・予算：キャリア支援は今年度145,670の予算を請求している。そのまま認められる見込み。
- ・半場は2013年度をもって委員長を退きたいと考えている。後任の委員長候補を決めたい。委員長は全国委員会の承認を得る必要がある。

①若手支援

1) 生態学会でのフォーラム開催：継続。

＜検討事項＞

1. 講演者の選定にあたっては女性が含まれるように考慮できないか（生態学会員の学生会員には女性が非常に多い）。
2. フォーラム講演者に謝礼を支給できないか。→常任委員会で検討してもらう。
3. フォーラム講演者が学会の他企画にも参加するため連泊する場合、宿泊費の支給をどうするか。

2) 生態学会での企業ブースおよび企業説明会：継続。
＜検討事項＞出展企業の募集方法。協賛企業を対象に出展を募ると負担が少なく継続性も保てるが、出展数を増やすのが難しい。外部委託するか？（リバネスさんなど）

3) HPを引き続き維持、「生態学若手の会」とリンクする（担当：池田さん）：継続。これまでのフォーラムのパワーポイントを引き続き公開する等、コンテンツのさらなる充実を目指す。

4) 日本学術会議若手アカデミーの若手ネットワークと連携。

②男女共同参画

担当：別宮さん、池田さん、坂田さん、三宅さん

- 1) 10月の連絡会シンポジウムへの参加
- 2) 連絡会運営委員会への参加（年3回）
- 3) 「女子中高生夏の学校」への協力（鹿児島大／川西さんに依頼）
- 4) 生態学会において活動を紹介（ポスター等）。アンケート調査など。

＜検討事項＞子育て中の学会員が参加し易くするため、大会期間になるべく多くの休日が含まれるように常任委員会で検討してもらう。

c. 2012年度のキャリア支援専門委員会の活動について（報告）

①全体

キャリア支援HPを生態学会HPの比較的めだつ場所に移していただいた。「生態学若手の会」と引き続きリンク。http://www.esj.ne.jp/careersupport/crrsprt_index.html

②男女共同参画

- 1) 2012年10月7日の学協会シンポジウム（慈恵医科大学）にて生態学会の活動をポスター発表（三宅）。
- 2) 学協会連絡会運営委員会への参加（委任状提出含む）
- 3) 大規模アンケートへの協力
- 4) 「女子中高生夏の学校」への参加（「水辺の生態系を観察しよう」：担当は東京農工大学 大橋さん）。

（文責：半場祐子）

14. 電子情報委員会

参加者：竹中明夫（委員長）、大澤剛士、富田基史、眞板英一、牧野能士（会計幹事、オブザーバー）、鈴木（事務局、オブザーバー）（欠席：久保、関野）

a. 報告事項

①SSLサーバ保証書の購入

2012年8月より、https接続が可能になった（セキュリティの確保）

②大会サイトのWordPress（フリーのCMS）による構築
サイト構築までは電子情報委員会、更新は大会企画委員会で行った。

③学会レンタルサーバーの稼働状況

2012年春にMLシステムの不調があったが、メモリの増設により安定稼働。

④学会ページのリニューアルについて

事務局で全面リニューアルし、2012年11月5日に切り替えた。

b. 審議事項

①選挙の電子投票について

2011年は手作りシステムによる電子投票を試みたが、投票率の向上は見られなかった。省力化・低コスト化の効果もそれほど大きくなかったが、次回も電子投票を実施してほしいとの要望が会長・幹事長からあった。今回も同システムで対応することはできる。長期的にどうするか(すべて電子化するか)、学会の方針が必要。

②会員システムの更新について

ウェブベースで、会員が自分のデータにアクセスして確認・編集できるシステムを検討中。業者に見積を依頼している。100万以内でできそう。課題はセキュリティ確保、英語対応。どこまで海外に開いた学会をイメージするか、中期的・長期的な学会の方針が必要。

③データペーパーのデータの置き場について

前回の委員会に話題になった。当面、現状(国立環境研究所内のJaLTERのサーバ内)で。今後、なんらかの検討が必要になる可能性もあり。サーバ管理を学会で担えるか?

④中・長期的なIT関連業務の実行体制について

一部会員のボランティアに過度に依存した体制は健全ではない。外注するか(コストの上昇、迅速性・柔軟性の低下は免れないが)、事務局にIT業務担当者を置くか。学会としての方針の検討が必要。

(文責: 竹中明夫)

16. 日本学術会議生態科学分科会の活動報告

第2回生態科学分科会(2012年5月28日)の議論で何度も取り上げられた論点
(巖佐によるまとめ)

[1] 若手の人材育成(ポスドク研究員を含む)と教育

■キャリアパス開拓の課題

生態学の博士取得者およびポスドク研究員経験者が社会で活躍できる場を確保することが必要。

社会と研究をつなげる役割のキャリアを開拓する。研究のオーガナイズをする役割は、国立環境研でもニーズがあるが、まだ定員職に成っていない。JST、日本学術振興会などの研究資金供給組織において、博士の学位をもち研究経験のある人が活躍している。

地方公共団体や高校教員などで博士の学位を持つ人の活躍が聞かれる。

官公庁でも、修士や博士の学位をもつ人が活躍できる社会になれるのではないかな。

大学院生には、アカデミックス以外の職場で活躍できることを理解してもらう必要がある。学会での企業ブースや企業説明会をもうけるか。

■大学院生の内向き志向

大学院生の内向き志向があるとされている。国外での研究経験を嫌う傾向、国際会議にさえ行きたがらない、ましては留学生は急激に減っている。

コミュニケーション能力を高める教育が必要。国際的な視野にたち、交流が進められる能力を育てる必要がある。

そのためには国際会議での発表に加えてある程度の長期での研究滞在をサポートする仕組みが望ましい。

■自然史教育の必要性

自然に対する知識や興味が少なくなっている。これは自然に親しむ経験をもたずに育っているからではないか。大学の学部教育や中高教育において、以前とは違ったフィールド教育を考える必要がある。

■質保証の議論

教養教育の質保証の議論があり、学士力が定義される。上記のコミュニケーション能力、国際的視野、自然史の常識、などを含められないか。

[2] 社会のニーズに対して生態学としてどのようなスタンスで対応するか

■生態学への外部からの期待

国際的な生物多様性プロジェクトへの貢献が求められている。生態学者はその意欲があるか? しばしば、政策に貢献するような研究をとという要求がしばしばなされる。これらに対して生態学者はどのように対応すべきか。

■生態学や研究成果を政策に反映させること

科学の成果を政策に反映させるには、分かりやすく説明できる能力を開発することが必要である。また政策に反映させる機会があるときはある程度の圧力をかける必要がある。

とくに東日本震災のあとの復元について、問題のある施策に対して反対意見があることを明確にするのは重要な課題である。学会のシンポジウムで取り上げてはどうかな?

■生態学の研究は社会から支持を受けているか?

環境科学としての生態学(たとえば保全についての役割)は十分に認知されていると思われる。

しかし生態学の本体はどうか? たとえば、食物網の問題、環境形成作用、種多様性の環境勾配、などの課題を明確にして、一般の社会に研究の意義をアピールする必要があるのではないかな?

生命科学と生態学のギャップの大きさに気づく必要がある。

研究の成果を社会に分かりやすく説明する能力を開拓する必要がある。

[3] 生態学の今後の研究課題、展望と問題点

■生態科学自体

生態学を、個体群生態学・群集生態学を中心的な分野として考慮したとき、動物行動学や集団遺伝学、生物地理学も含んで大きなひとまとまりの分野として成長している。応用生態学といえる林学、水産資源解析、病害虫防除学等を含めて、生態科学と考えられるであろう。これらの分野は集団生物学とかマクロ生物学とか様々な言葉で呼ばれるが、それらの間での意見の交換は緊密であり、進展の上で問題があるとは思われない。次世代を担う若手も多数おり、後継の学生のリクルートについても、また社会からの認知も十分であり、全体として大きな問題があるようには思われない。

生態科学は他分野との関連について考えるとき、大きく「環境科学」としての生態学、および「生命科学・生物学」としての生態学という2つの側面があらわれてくる。

それぞれについて次のようなシンポジウムを組んではどうか：

■環境科学としての生態学

「社会科学と生態学の接点」

■生理学／分子生物学／ゲノミクスとの接点を探る

「生態学と分子生物学の接点を探る」

◎第3回の生態科学分科会 2012年12月11日 10:30-17:00

生態科学をとりまく様々な話題について意見を交換した。

[1] 日本学術会議において、大型研究計画の領域設定と提案を募集する手続きがすすんでいる。統合生物学委員会のもとに生態科学分科会があるが、生態科学分科会からは「生態・環境」という領域名を提案し、研究領域の1つとして認められた。

その後、3月末の締め切りで研究計画の公募がある。昨年に、生態科学分科会からの提案を中静透委員長を中心にとりまとめた、「生物多様性観測ネットワーク」の案が文書として提出された。それに対する評価委員会からのコメントは、(1) ネットワークのコアとなる研究機関名を明確に指定するように、および(2) どこが新しいのかを明記せよというものであった。今回これらに答える形で準備をしている。

前者については京都大学の生態学研究センターの方に中心になっていただく案として準備が進んでいる。

後者については、1つのアイデアとして、生物多様性を測定するのに、連続的自動的測定装置だとか、無人の

飛行観測ロボットだとか、100個体以上を同時に位置を計測するテレメトリーだとかいった新しい機器を開発すること、生物多様性研究における図鑑作成など情報科学との協力なども話した。

生態科学分野から提案する研究領域名を議論するときに気づいたこととして、「生物多様性研究」という名称で、さまざまな生物種についてゲノム配列を明らかにする研究が急速にすすんでいること、他方で、生態系の研究として物質循環研究を中心とした地球科学として進められていること、である。これら両者の間において、生態科学の特色と役割を、どのように科学者コミュニティーでアピールするかが重要な課題である。

[2] 学部の教育において、生物学で何を教えるべきかというものの調査が行われている。それは、文系や理工系、生物系などの区別なく抽象的レベルで規定するものである。現在その文案に対するコメントが3月末締め切りで求められ、生態科学分科会でメーリングリストにより議論をしている。

[3] また、生態科学の発展に必要なこととして、行動生態学・個体群生態学において自動計測装置の発展の重要性（粕谷）、現在の学術体制・若手のキャリア・生態学の中核と成る研究機関（国立環境研、総合地球研、演習林／臨海実験所など）の動向（寺島）の話題提供があり、測定計測手法発展による生態学へのインパクト（ゲノミクスや微生物生態学など）、社会のニーズに対する距離の取り方などについて、活発に意見を交換した。

[4] 学術会議の予算が逼迫していることから、会議の開催回数を年2回程度までに制限することが要請され、ビデオ会議の使用も推奨されている。

（文責：巖佐庸）

B. 承認事項

1. 2012 年度決算

2012 年度予算案が承認された。

<一般会計>

収 入 の 部			支 出 の 部		
	12 予算	12 決算		12 予算	12 決算
会費			会誌発行費		
一般会員	31,000,000	31,934,100	ER	20,000,000	19,100,918
学生会員	8,000,000	8,184,800	生態誌	5,000,000	4,604,643
外国会員	250,000	267,100	保全誌	1,900,000	2,198,050
団体会員	2,000,000	2,190,000	ニュースレター	1,200,000	963,428
賛助会員	20,000	0	和文誌編集費	70,000	56,641
和文誌購読	600,000	572,000	小 計	28,170,000	26,923,680
小 計	41,870,000	43,148,000	会議費	150,000	209,835
ER 売上還元金	1,215,000	1,215,000	旅費・交通費	3,000,000	2,413,712
編集事務費用	1,665,000	1,665,000	人件費	13,500,000	15,781,802
Back No. 売り上げ	0	37,000	地区会へ還元金	1,600,000	2,066,300
科研費	7,000,000	8,100,000	大会支出	20,000,000	21,963,883
出版印税	750,000	763,710	公開講演会	1,200,000	1,204,200
利子収入	10,000	5,737	INTECOL 会費	350,000	350,263
広告代	180,000	180,000	事務費		
著作権使用料	300,000	426,001	通信費	850,000	753,147
ER 超過ページ代	700,000	738,760	消耗品費	250,000	255,441
大会収入	20,000,000	26,499,625	雑費	250,000	225,275
講習会費	400,000	54,000	銀行手数料	140,000	130,610
その他	0	5,250	レンタルサーバ料	413,750	413,750
前年度繰越金	37,973,598	37,973,598	事務所維持費	1,680,000	1,680,000
			税務費用	500,000	388,000
			小 計	4,083,750	3,846,223
合 計	112,063,598	120,811,681	各種委員会費	1,500,000	1,379,126
単年度収入	74,090,000	82,838,083	選挙費	0	0
			EAFES 費用	100,000	37,952
			講習会費	400,000	295,315
			60 周年費用	0	436,930
			次年度繰越金	38,009,848	43,902,460
			合 計	112,063,598	120,811,681
			単年度支出	74,053,750	76,909,221

<特別会計>

特別会計Ⅰ（宮地基金）

収 入 の 部			支 出 の 部		
	12 予算	12 決算		12 予算	12 決算
前年度繰越金	2,802,061	2,802,061	宮地賞賞金	300,000	300,000
預金利息	0	433	雑費	2,835	840
合 計	2,802,061	2,802,494	次年度繰越金	2,499,226	2,501,654
			合 計	2,802,061	2,802,494

大島基金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	12 予算	12 決算		12 予算	12 決算
前年度繰越金	9,334,728	9,334,728	大島賞賞金	200,000	200,000
預金利息	0	1,479	雑費	1,995	1,995
			次年度繰越金	9,132,733	9,134,212
合 計	9,334,728	9,336,207	合 計	9,334,728	9,336,207

琵琶湖賞基金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	12 予算	12 決算		12 予算	12 決算
前年度繰越金	732,461	732,461	旅費	100,000	0
預金利息	0	120	その他諸費用	0	315
			次年度繰越金	632,461	732,266
合 計	732,461	732,581	合 計	732,461	732,581

鈴木基金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	12 予算	12 決算		12 予算	12 決算
寄付	—	5,000,000	次年度繰越金	—	5,000,110
預金利息	—	110			
合 計	0	5,000,110	合 計	0	5,000,110

2. 第 62 回大会（2015 年）開催地

第 62 回大会は九州地区が担当し、2015 年 3 月に鹿児島にて行うことが承認された。

3. 第 63 回大会（2016 年）担当地区会

第 63 回大会は東北地区会が担当することが承認された。

C. 審議事項

1. 2013 年度予算案について

2013 年度予算案が決議された。

<一般会計>

収 入 の 部			支 出 の 部		
	12 決算	13 予算		12 決算	13 予算
会費			会誌発行費		
一般会員	31,934,100	32,000,000	ER	19,100,918	19,500,000
学生会員	8,184,800	8,000,000	生態誌	4,604,643	5,000,000
外国会員	267,100	250,000	保全誌	2,198,050	2,300,000
団体会員	2,190,000	2,000,000	ニュースレター	963,428	1,000,000
賛助会員	0	0	和文誌編集費	56,641	70,000
和文誌購読	572,000	600,000	小 計	26,923,680	27,870,000
小 計	43,148,000	42,850,000	会議費	209,835	200,000
ER 売上還元金	1,215,000	1,305,000	旅費・交通費	2,413,712	2,500,000
編集事務費用(シュプリンガーより)	1,665,000	1,710,000	人件費	15,781,802	15,000,000
Back No. 売り上げ	37,000	0	地区会へ還元金	2,066,300	1,600,000
科研費			大会支出	21,963,883	23,000,000
国際発信力強化	—	0	公開講演会	1,204,200	1,300,000
ER	6,800,000	0	INTECOL 会費	350,263	350,000
公開講演会	1,300,000	1,300,000	事務費		
小 計	8,100,000	1,300,000	通信費	753,147	800,000
出版印税	763,710	700,000	消耗品費	255,441	250,000
利子収入	5,737	10,000	雑費	225,275	1,250,000
広告代	180,000	280,000	銀行手数料	130,610	140,000
著作権使用料	426,001	400,000	レンタルサーバ料	413,750	413,750
ER 超過ページ代	738,760	700,000	事務所維持費	1,680,000	1,680,000
大会収入	26,499,625	23,000,000	税務費用	388,000	400,000
講習会費	54,000	100,000	小 計	3,846,223	4,933,750
その他	5,250	0	各種委員会費	1,379,126	1,500,000
前年度繰越金	37,973,598	43,902,460	選挙費	0	400,000
合 計	120,811,681	116,257,460	EAFES 費用	37,952	200,000
単年度収入	82,838,083	72,355,000	講習会費	295,315	300,000
			60 周年費用	436,930	200,000
			法人化準備費	—	1,000,000
			国際化推進費	0	0
			次年度繰越金	43,902,460	35,903,710
			合 計	120,811,681	116,257,460
			単年度支出	76,909,221	80,353,750

<特別会計>

特別会計 I (宮地基金)

収 入 の 部			支 出 の 部		
	12 決算	13 予算		12 決算	13 予算
前年度繰越金	2,802,061	2,501,654	宮地賞賞金	300,000	300,000
預金利息	433	0	雑費	840	1,575
合 計	2,802,494	2,501,654	次年度繰越金	2,501,654	2,200,079
			合 計	2,802,494	2,501,654

大島基金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	12 決算	13 予算		12 決算	13 予算
前年度繰越金	9,334,728	9,134,212	大島賞賞金	200,000	200,000
預金利息	1,479	0	雑費	1,995	1,155
			次年度繰越金	9,134,212	8,933,057
合 計	9,336,207	9,134,212	合 計	9,336,207	9,134,212

琵琶湖賞基金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	12 決算	13 予算		12 決算	13 予算
前年度繰越金	732,461	732,266	旅費	0	300,000
預金利息	120	0	その他諸費用	315	100,000
			次年度繰越金	732,266	332,266
合 計	732,581	732,266	合 計	732,581	732,266

鈴木基金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	12 決算	13 予算		12 決算	13 予算
寄付	5,000,000	0	鈴木賞賞金	0	150,000
前年度繰越金		5,000,110	雑費	0	1,575
預金利息	110	0	次年度繰越金	5,000,110	4,848,535
合 計	5,000,110	5,000,110	合 計	5,000,110	5,000,110

2. 会則改正について

* ABC 会員制度廃止に伴う以下の会則改定案が決議された。(下線部：追加)

日本生態学会 会則 (2013 年 3 月改正)

第 2 章 会 員

第 4 条 「会員」本会の会員は正会員（一般、学生）(A、B、C)、団体会員(A、B、C)、賛助会員、名誉会員とする。

- 正会員は本会の趣旨に賛成し、所定の入会手続きを経て、所定の会費を納める個人。
- 団体会員は本会の趣旨に賛成し、所定の入会手続きを経て、所定の会費を納める団体。
- 賛助会員は本会の趣旨に賛成し、別に定める賛助会員会費を納める個人または団体。
- 名誉会員は日本の生態学および本会の発展に大きな功績のあった個人のうちから、全国委員会の推薦により、総会において決定される。

第 7 条 「権利」会員はつぎの権利をもつ。

- 会誌 (Ecological Research、日本生態学会誌、保全生態学研究) および印刷物 (ニュースレター、名簿、大会プログラムなど) の配布を受けること。ただし会誌については、A 会員は Ecological Research と日本生態学会誌、C 会員は保全生態学研究のみの配布を受ける。ただし会誌「保全生態学研究」については別途購読料が必要である。
- 会誌に投稿すること (正会員、名誉会員に限る)。ただし、C 会員は日本生態学会誌への投稿はできない。

iii) 本会の会合に出席し、研究発表・講演を行い、意見をのべること (正会員、名誉会員に限る)。ただし、C 会員は日本生態学会での発表はできない。

iv) 本会の事業・運営に関し、全国委員会に対しまたは総会において意見をのべること。

v) 本会の会長・全国委員を選任し、またはこれらに選任されること。ただしこの権利は正会員に限る。
(* ABC 会員制度は 2013 年分をもって廃止とします)

3. 法人化について

* 総会にて以下の方針が決議された。

- 日本生態学会は、平成 25 ～ 26 年に一般社団法人へ移行します。
- 法人化ワーキンググループに、法人化事務手続きを一任させてください。
- 定款案を Web 上で公開し、数ヶ月間会員のみなさんのご意見をいただいて確定。
- 機関設計 (主なもののみ。カッコ内は法律上の呼称)

現体制		新体制 (一般社団法人)	
役職名など	対応する会議	役職名など	対応する会議
会長		会長 (代表理事)	
幹事長		専務理事	
常任委員	常任委員会	理事	理事会
全国委員	全国委員会	代議員 (社員)	社員総会 *
会員	総会	会員	会員総会 *

* 社員総会と会員総会の仕組みは現在検討中。(案1: 社員総会に会員が傍聴者として出席して発言権を認める。案2: 会員総会の決議を社員総会で追認するなど)

5. 移行にともなう主な変更点・留意点

- (1) 代議員制: 法人法上の社員を全国委員(代議員)とするため、それ以外の会員は社員総会での法律上の議決権がなくなるが、これまでどおり社員総会あるいは会員総会での発言権を認め、会員の意向を代議員が尊重する仕組みにする。
- (2) 地区会: 地区会の会計は会計年度ごとに中央に報告いただくことで管理し、これまでどおり地区会が活動できるようにする予定。現在の地区会資金も引き続き利用できるようにする予定。
- (3) 選挙: これまでどおり会員による全国委員と次期学会長の選挙を行い、結果を反映させる。次回(2013年秋)選挙は、法人化後の代議員および次次期理事長(会長)候補とする前提で行う。
- (4) 法人登記: これは現会長、次期会長、幹事長などを設立時社員・役員として少人数で行う。登記後に、設立時社員臨時総会場で上記選挙で選ばれた代議員を社員とする。任意団体は3月まで存続する。

6. 主なスケジュール

日付	現体制	新体制
2013年3月	全国委員会・総会 (会員への説明)	
4月～9月	定款案の意見聴取 →定款案の決定	
10月	選挙	(新体制選挙)
12月		法人登記
2014年1月		設立社員総会
3月	任意団体解散	会員総会

4. 要望書

自然保護専門委員会からの要望書2件を決議した。

① 沖縄県名護市辺野古・大浦湾の米軍基地飛行場建設に伴う埋め立て中止を求める要望書

要望書提出先: 防衛大臣、沖縄防衛局長、環境大臣、沖縄県知事

沖縄県名護市の辺野古および大浦湾一帯は、サンゴ礁に隣接して海草藻場やマングローブ、内湾の細砂底といった環境が混在し、生物多様性が極めて高い地域である。この地域は、国内最後のジュゴン個体群をはじめとする多くの絶滅危惧種の生息地であり、また、未記載種の発見が相次ぐ海域でもある。日本全体でサンゴ礁の衰退が懸念される昨今、サンゴ礁生態系が本来内包する環境の多様性と連続性を色濃く残す本海域は貴重な存在である。そしてまさにその海域に米軍飛行場の建設が計画され、今年その埋め立てが申請されようとしている。この貴重な海域の生態系と生物多様性が失われぬよう、ここに埋め立ての中止を要望する。

日本生態学会は2000年3月、この海域の詳細な生態調査の実施と、それをもとにしたジュゴンの保護計画の立案を求める要望書を決議し、国や沖縄県に提出した。国は「普天間飛行場代替施設建設事業に係る環境影響評

価」(辺野古アセス)を行ない、この海域の生物多様性と生態系の重要性を評価し、基地建設による環境への影響を認める一方で、「環境に影響の少ない工事方法等」を提案している。本計画の実施は、沖縄県知事も「辺野古アセスに対する意見書で「環境を保全することは不可能」と断じているように、以下のような理由で、大きな問題点がある。

1. 近年この海域に、アオサングの大コロニーが存在すること、国内での絶滅が危ぶまれていた褐藻類ウミボスが生息することなどが明らかになった。さらに、甲殻類、ナマコ類、貝類、藻類など、本アセスでも触れられていないさまざまな分類群の未記載種の発見が相次いでいる。この中には、オオウラボコビピンノのように、世界で当海域でのみ確認される種も存在する。埋立によってこの海域一帯の自然環境を損なうことは、日本における生物多様性の宝庫を失うことになる。
2. 国際的な保護動物であり、国内では絶滅の危機に瀕しているジュゴン個体群の維持と回復のためには、大浦湾一帯と周辺域を含めて、広範囲に渡る連続的な海域の保護と、餌となる海草群落の保全が必須であり、本計画の実施はジュゴン個体群の維持にさらなる影響を与えると危惧される。
3. 環境の多様性と連続性はこの海域の大きな特徴である。この海域には、造礁サンゴ類の種多様性が高いサンゴ群集、県内最大規模の海草藻場、多くの未記載種が発見された転石斜面、国内では珍しい礁原内に発達する細泥底などの変化に富んだ環境が隣接して存在する。また、周囲にはイタジヤやオキナワウラジロガシを主とする深い森林が存在し、河口には名護市の天然記念物であるマングローブや干潟が発達するなど、総じて高い自然度が維持されている。これらの環境は、水循環により、また、河川を遡上するリュウキュウアユやボウズハゼ類の移動によって、互いに境界無く連続している。このような生態系のつながりや生態系機能が本アセスでは見落とされている。このような欠陥を持ったアセスメントに基づく環境対策では、本海域を含む自然環境の保全は不可能である。
4. 埋立には大量の土砂が必要であるが、本アセスでは、土砂採取が環境に与える影響は調達先の責任であるとし、全く触れていない。県内から海砂を採取した場合、サンゴ礁生物多様性の一部である砂底上の生態系を直接損ねるだけでなく、周辺の砂の移動を招き、隣接生態系にも影響を及ぼすことは確実である。また、本土からの埋立資材の調達案に関しても、外来種侵入に対する実効的な対策は示されていない。埋立工事の進行は、沖縄のサンゴ礁生態系に致命的かつ不可逆的な影響を与えることは明らかである。

以上のように、この海域の自然は生態学的に見てきわめて貴重なものであり、本計画はこの海域だけでなく、沖縄県全域のサンゴ礁生態系と生物多様性に深刻な影響を与えるものである。日本は、先進国の中で唯一、自国内にサンゴ礁生態系を持ち、それゆえに先進国の中で最高の海の生物多様性を誇っているが、本計画はそのよ

うなかけがえのない宝を自ら損なうような、誤ったものである。生物多様性条約（CBD）のCOP10で約束された愛知ターゲットを率先して推進する義務を負った日本が、その目標の保護区を拡大するのではなく、生物多様性を大きく損ねる可能性の高い本埋立計画を推進することは、世界の期待を大きく裏切ることにもなりかねない。

日本生態学会は、沖縄の海の生物多様性がジュゴンとともに未来に引き継がれるために、本海域の埋立計画を中止することを強く要望する。

以上決議する。

2013年3月8日

第60回日本生態学会大会総会

②中池見湿地への新幹線敷設計画に対して、新たな環境影響評価調査を求める要望書

要望書提出先：国土交通大臣、環境大臣、福井県知事、鉄道・運輸機構理事長、敦賀市長

福井県敦賀市にある中池見湿地は、厚いミズゴケ泥炭層を持つ袋状埋積谷として、また氾濫や水田耕作などの攪乱を経験してきた低層湿原として、現在の日本ではきわめて貴重な湿地として評価されている。この湿地には、オオニガナ、オオアカウキクサなどの北陸の山間湿地を代表する植物に加え、日本列島の氾濫原湿地を代表し今では絶滅危惧種となっているミズトラノオ、ミズアオイ、ミズタガラシ、デンジソウ、サンショウモなどの植物が豊富に生育する点に特徴があり、ゲンゴロウ、ゲンジボタル、ヘイケボタル、ナカイケミヒメテントウ、ネアカヨシヤンマ、サラサヤンマなどの低湿地を代表する昆虫も数多く見つっている。水路にはメダカが多く生息するが、この日本海側の多雪地帯に分布するメダカ集団は、この中池見湿地を模式産地にして新種記載された。

かつてこの地に液化天然ガス貯蔵庫を作る計画が持ち上がった際、日本生態学会はこの計画の再考と湿地の保護を求める要望書を1996年に事業者と国、および福井県に提出している。その後、中池見湿地の自然の価値は全国的・世界的に認められることになり、開発計画は白紙撤回され、さらに2012年には、中池見湿地は越前加賀海岸国定公園の一部として追加指定され、さらに同年7月、ラムサール条約登録湿地となった。

ところが、2012年8月、北陸新幹線敷設計画が国から発表され、その計画では、新幹線がこの湿地の一部を横切ることになっている。この計画は2002年に事業アセスメントが行なわれ、工事実施計画の申請が国土交通省に行なわれたものの、その認可がすぐにはおらず、2012年6月に認可が下りたものである。しかも、その路線は、事業アセスメントの計画路線よりも150メートル湿地側に変更されている。現在路線が計画されている部分は、湿地から流れ出す小川ぞいの後谷と呼ばれる場所で、かつて水田耕作が行なわれていた場所でもある。この地域には、ミズトラノオやトチカガミをはじめとする湿地植物が多く見られ、小川にはアブラボテやタガイの生息が見られる。この計画が実行に移されたなら、後谷の湿地の自然が工事によって壊滅的な影響を受けるだけでなく、トンネル掘削が湿地の水収支に与える影響や、

新幹線の運行が湿地に生息する生物に与える影響も危惧される。国は、新幹線敷設予定地がラムサール条約湿地に登録されたばかりの場所であることを重く受け止め、第10回生物多様性条約締約国会議（COP10）で合意された、人類が自然と共生する世界を2050年までに実現することを目指す愛知目標をもかんがみ、本計画が湿地の生物多様性や生態系に対して与える影響について、詳細な環境影響評価調査を実施し、その結果をふまえた計画の再考を要望する。

以上決議する。

2013年3月8日

第60回日本生態学会大会総会

Ⅱ. 第60回日本生態学会大会の記録

第60回日本生態学会大会はグランシップ（静岡県コンベンションアーツセンター）を会場として2013年3月5日～3月9日に開催されました。

大会期間中に公開講演会1、60周年記念シンポジウム1、シンポジウム13、フォーラム6、企画集会17、自由集会36、一般講演（口頭発表）211、一般講演（ポスター発表）894、高校生ポスター26、が行われました。参加者は2,423名でした。5日間の日程とポスター賞（日本生態学会公認表彰）受賞者は以下の通りです。

日 程

- 3月5日 全国委員会、各種委員会（大会企画委員会、日本生態学会誌刊行協議会、Ecological Research刊行協議会、保全生態学刊行協議会、将来計画専門委員会、生態学教育専門委員会、外来種検討作業部会、自然保護専門委員会、生態系管理専門委員会、大規模長期生態学専門委員会、野外安全管理委員会、キャリア支援専門委員会、電子情報委員会）、自由集会
- 3月6日 60周年記念シンポジウム、シンポジウム、一般講演（ポスター発表）、フォーラム、企画集会、自由集会
- 3月7日 シンポジウム、一般講演（口頭発表）、一般講演（ポスター発表）、フォーラム、企業説明会、自由集会
- 3月8日 総会、各賞授賞式、受賞講演、一般講演（口頭発表）、フォーラム、懇親会
- 3月9日 公開講演会、一般講演（口頭発表）、高校生ポスター、フォーラム、ランチョンフォーラム

ポスター賞受賞者

<群落>

【最優秀賞】

「デジタルカメラ画像のRGB解析による、草原植物群落の季節変化の観測」* 井上智晴（早稲田大・院・先進理工）、永井信（JAMSTEC）、小泉博（早稲田大・教育）

【優秀賞】

「蘚苔類群落の形態の違いがノキシノブの前葉体および幼孢子体の定着に与える影響」* 水野大樹（千葉大・院・園）、竹崎大悟（千葉大・園）、百原新、沖津進（千葉大・院・園）

<植物個体群・菌類>

【優秀賞】

「乗鞍岳、森林限界移行帯におけるオオシラビソ変形樹の形成過程」* 前田久美子、丸田恵美子（東邦大理）、澤田晴雄（東大愛知演習林）

「亜熱帯林やんばるにおける外生菌根菌群集の季節変化」* 松岡俊将（京大・生態研セ）、阪口瀬理奈（京大・生態研セ）、川口恵里（京大・理）、広瀬大（日大・薬）、大園享司（京大・生態研セ）

<植物生理生態>

【優秀賞】

「水生・湿性植物 55 分類群の沈水状態における光合成炭素源」* 山ノ内崇志、石川慎吾（高知大・院）

「光・低温ストレスに対するクマイザサの生理的応答」* 橋口恵（北大・環境科学院）、小野清美、原登志彦（北大・低温研）

「キク属植物の細胞内と細胞外に存在するフラボノイドの各種環境ストレスへの応答」* 上原歩（農工大・院・連合農）、岩科司（農工大・院・連合農、科博・植物）

「高緯度北極に生育する地衣類の水利用と光合成活動の解明」* 井上武史（総研大）、工藤栄（総研大、極地研）、内田雅己（総研大、極地研）、田邊優貴子（東大）、小杉真貴子（極地研）、井上正鉄（秋大）、神田啓史（極地研）

<植物生活史・繁殖>

【優秀賞】

「雌雄異株植物において開花フェノロジーの性差はなぜ存在するのか？」* 松久聖子、丑丸敦史（神戸大・人間発達環境）

「印旛沼の富栄養化とオニビシの繁茂—培養実験によるヒシとオニビシの成長特性の検討—」* 赤堀由佳、鏡味麻衣子（東邦大院・理）、吉田丈人（東京大・総合文化）、西廣淳（東京大・農学生命科学）

<遷移・更新>

【最優秀賞】

「湿原域における放棄牧草地の植生遷移を決定する要因」* 柴田昌俊（北大・農）、森本淳子（北大院・農）、三島啓雄（北大院・農）、比嘉基紀（北大院・農）、志田祐一郎（北大院・農）、中村太士（北大院・農）

【優秀賞】

「萌芽特性の異なる樹種における地下貯蔵物質—個体サイズおよび伐採前後での変動—」* 村尾未奈（東農大・院）、藤原栞（東農大）、正木隆、壁谷大介（森林総研）、佐藤明（東農大）

<景観・都市>

【最優秀賞】

「草地性節足動物群集の季節変化：草地自体の植生と周辺景観の変化に対する反応」* 弘中豊、小池文人（横浜国大・環境情報）

【優秀賞】

「中山間農地の森林組成の違いが森林性のカエル個体群に与える影響」* 佐藤ひかる、星崎和彦、蒔田明史（秋田県大・生物資源）、黒江美紗子（九州大・理）

「Effects of habitat reduction and heat islands to *Mecopoda nipponensis*」* H. Kiyokawa, M. Kiyoshima, Y. Takeda

(Toho University), M. Nagumo (Hokkaido University), M. Hasegawa (Toho University)

<動物と植物の相互関係・送粉>

【最優秀賞】

「アリを撃退する送粉者：アリ植物オオバギ属の送粉戦略」* 山崎絵理（京大生態研）、乾陽子（大阪教育大）、酒井章子（地球研）

「花形質から送粉者相は予測できるか？」* 平岩将良（神戸大・人間発達環境）、新庄康平、掛谷知世（富山大・理）、長谷川雅美（東邦大・理）、石井博（富山大・理）、丑丸敦史（神戸大・人間発達環境）

【優秀賞】

「盗蜜者がもたらすオオバギボウシへのマルハナバチの訪花行動の変化」* 山田歩、瀧本岳（東邦大・理）

「高山帯立山において柱頭付着花粉相は送粉者によって変化するのか？」* 日下石碧（神戸大・人間発達環境）、新庄康平（富山大・理）、石井博（富山大・理）、丑丸敦史（神戸大・人間発達環境）

<進化>

【最優秀賞】

「キューバ産アノールトカゲ属の四肢における筋骨格形態と行動生態の関係」* 安西航（東大・院理）、大村文乃（東大・院農）、Cadiz Diaz Antonio、河田雅圭（東北大・院生命）、遠藤秀紀（東大・博物館）

【優秀賞】

「複数の核遺伝子による多足亜門の系統解析」* 宮澤秀幸、蘇智慧（阪大・院理、JT 生命誌研究館）

「シマホルトノキにおける生育環境に応じた遺伝構造と分化維持要因」* 須貝杏子（首都大・牧野標本館）、鈴木節子、永光輝義（森林総研）、村上哲明、加藤英寿（首都大・牧野標本館）、吉丸博志（森林総研・多摩森林科学園）

<生物多様性>

【最優秀賞】

「北海道十勝川流域における河川魚類群集の典型性評価」* 山本逸生、赤坂卓美、石山信雄、伊藤弘樹、中村太士（北大・農）

【優秀賞】

「海洋環境データと漁獲量からみた東北沿岸底生性魚類の生息域変化」* 須田亜弥子（東北大・生命）、土居秀幸（広島大・サステナセンター）、成松庸二（東北水研）、河田雅圭（東北大・生命）

「インドネシア・サトウキビ農場における土壌管理の違いはリターの糸状菌群集構造を変える」* 三浦季子、金子信博（横国院・環境）、Niswati, A., Susilo, F.X., Swibawa, IG., Muhajir, U. (Univ. Lampung)

<動物群集>

【優秀賞】

「Trophic dynamics of lizard communities in Ankarafantsika National Park, Madagascar」* Kawai, U. (Texas Tech Univ.), Perry, G. (Texas Tech Univ.), Hori, M. (Kyoto Univ.), Horita, J. (Kyoto Univ.), Mori, A. (Kyoto Univ.)

「人工林によって断片化された広葉樹林の鳥類多様性—ランドスケープ構造と液果生産量の効果—」* 原澤翔

太（京大院・農）、正木隆（森林総研）、滝久智（森林総研）、永光輝義（森林総研）、石金卓也（農大）、村尾未奈（農大院）、前田孝介（農大）、井鷲裕司（京大院・農）
「東北地方太平洋沖地震後の岩礁潮間帯生物群集：帯状分布の時空間パターン」* 岩崎藍子、飯田光穂、萩野友聡、阪口勝行、佐原良祐、野田隆史

<動物生活史・繁殖>

【最優秀賞】

「濁りによる魚類仔魚の成長・生残の向上」大畑亮輔、益田玲爾、山下洋（京大フィールド研）

【優秀賞】

「性的不能と認識されたオスは浮気される——シジウカラによる受精保険仮説の実験的検証」* 油田照秋、乃美（北大・環境科学院）、小泉逸郎（北大・創成）

<動物個体群>

【優秀賞】

「標識再捕獲法と遺伝的手法によるエゾヤチネズミ個体群の移入率の推定：異なる手法から得られる推定値の信頼性の検討」* 山田敏也（北大・環境科学院）、齊藤隆（北大・FSC）

「個体ベースモデルを用いた感染症の空間的拡大の研究」* 内田さち恵（奈良女院・人間文化）、高須夫悟（奈良女・理）

<行動>

【最優秀賞】

「Who is the most successful sire?: Male reproductive success of Bornean orangutans in a semi-wild population」*Tomoyuki Tajima

【優秀賞】

「盗葉緑体が光合成ウミウシの走光性に与える影響」* 宮本彩加（奈良女子大・理）、酒井敦（奈良女子大・理）、中野理枝（琉球大・理）、遊佐陽一（奈良女子大・理）

<保全>

【最優秀賞】

「DNA バーコーディングを用いた糞分析に基づく、絶滅危惧種アカガシラカラスバトの食物構成とその季節変化の解明」* 安藤温子（京大院・農）、鈴木節子（森林総研）、堀越和夫（小笠原自然文化研究所）、鈴木創（小笠原自然文化研究所）、梅原祥子（小笠原自然文化研究所）、村山美穂（京大・野生動物研究センター）、井鷲裕司（京大院・農）

【優秀賞】

「佐渡固有のツチガエル近縁種における空間分布と遺伝的構造」* 山中美優（東大・農）、小林頼太、関谷國男（新潟大・超域）、宮下直（東大・農）

「母系・両系 DNA マーカーを用いた日本沿岸に生息するスナメリの遺伝的集団構造の解明」* 會津光博（九大・比文）、西田伸（宮大・教育）、楠見淳子（九大・比文）、田島木綿子（科博）、山田格（科博）、天野雅男（長大・水産）、荒谷邦雄（九大・比文）

<生態系管理>

【最優秀賞】

「森林-溪流生態系食物網における放射性セシウムの生物濃縮：福島県大沢川と群馬県大谷山流域の事例」* 岩

本愛夢、岡田健吾、境 優（農工大院・農）、根岸淳二郎（北大院・地球環境）、布川雅典（北大院・農）、五味高志（農工大院・農）

「圃場整備地域における水田生態系の保全—用水路を活用した魚類の生息地再生—」* 石間妙子、村上比奈子、福島純平、松島一輝、関島恒夫（新潟大・自然科学）

<外来種>

【最優秀賞】

「フィリマンゲース駆除による絶滅危惧種の回復過程：奄美大島における長期モニタリングによる評価」* 深澤真梨奈（東大・農）、亘悠哉（日本森林技術協会）、深澤圭太（国環研）、西嶋翔太（東大・農）、山田文雄（森林総研）、阿部慎太郎（環境省）、南雲聡（鹿児島県）、宮下直（東大・農）

「外来ニジマスの流域内分布パターン—生活史との関係—」* 金澤友紀代、山崎千登勢、田中友樹、高屋浩介（北大・環境科学院）、小泉逸郎（北大・創成）

「The kin recognition behaviors and genetic structures of 8 Argentine ant (*Linepithema humile*) super colonies in western Japan」* Kazuki Sato (Hokkaido univ. of education), Hironori Sakamoto (Tamagawa univ.), Mldori Kobayashi (Kobe univ.), Mamiko Ozaki (Kobe univ.), Seigo Higashi (Hokkaido univ.), Takahiro Murakami (Hokkaido univ. of education)

<物質循環>

【最優秀賞】

「冷温帯落葉広葉樹林において降雨イベントが土壌呼吸に与える影響」* 安西理（早稲田大・院・先進理工）、中一友香（早稲田大・教育）、根村真希、友常満利（早稲田大・院・先進理工）、小泉博（早稲田大・教育）

【優秀賞】

「森林土壌の窒素無機化速度に対する pH と C/N 比の影響」* 山田高大（京都大・農）、藤井一至（森林総研）、舟川晋也（京都大・農）

「冷温帯コナラ林におけるキノコの CO₂ 放出量とその季節変化」* 三島綾乃（早稲田大・教育）、友常満利（早稲田大・院・先進理工）、吉竹晋平（岐阜大・流圏セ）、小泉博（早稲田大・教育）

<高校生ポスター>

【最優秀賞】

「ミドリゾウリムシが引き起こす回転流について」海野弘幸、筑地悠妃、足立実佐紀、大塚桃花（静岡県立静岡農業高等学校・生物部）、篠田聖児（静岡県立静岡農業高等学校・教諭）

「神戸周辺に生息するカタツムリの研究」井上智重子、太田耕輔、日下桜子、高見優生（兵庫県立神戸高等学校・総合理学科・2 年）

「ツマグロヒョウモン蝶の適応戦略」上南静佳、今園真聡、久保田絢、中川緑、山口紘明（立命館高等学校）

【優秀賞】

「ギンリョウソウ周辺における外生菌根菌群集構造」西村明洋、永末透威、藤森友太、越智匠海（立命館慶祥中学校・高等学校）

「キノコの植物成長物質を活用した富士山緑化」栗田楓、

中井瑠美、佐野愛美、大川紅衣、山地由夏、塩川真由（静岡県立富岳館高等学校・総合学科・2年）

「シラホシコヤガ幼虫の餌製隠れ蓑の機能と追いはぎ行動～非常食か、迷彩服か、防寒着か？～」東島康峻、安元暁子（早稲田佐賀高等学校）

「国蝶オオムラサキを活用して地域の活性化をはかる」神谷桜、今野翔平、坂本陸王、樋口真美、吉田文也、原田綾華、三日月茜（大阪府立枚岡樟風高等学校）

「岐阜県内におけるイワナのmtDNAの変異と揖斐川水系支流におけるイワナの斑紋異常」二村凌（岐阜県立岐阜高等学校）、向井貴彦（岐阜大学地域科学部）、高木雅紀（岐阜県立岐阜高等学校）

【特別奨励賞】

「守れ！ふるさとのカミササンショウウオ～保護活動と遺伝的多様性の分析Ⅲ～」二村凌、米川可奈子、大澤拓巳、近藤理子、安田伸、宇野真、加藤真帆、小林敬弘、真田樹也、篠原悠希、高橋晃太郎、常川晃輝、廣江永、細江恭輔、堀口晏奈、安澤晃、馬淵朋哉、梅村啓太郎、大前佳穂（岐阜県立岐阜高等学校）、向井貴彦（岐阜大学地域科学部）、高木雅紀（岐阜県立岐阜高等学校）

「奄美大島のノイヌ・ノネコの食性調査」大久保千裕、井上孝夫、平山颯之介、熊谷美音、神出真由、辻井美玖、白川美里、丸岡優里、上久保真里（大阪府立豊中高等学校・生物研究部）

「都内における鳥類相とスズメの生態～都心、住宅地、郊外での比較～」鬼頭健介、根岸康介、関口伸一（海城中学校・高等学校・生物部）

「塩湿地性稀少樹種ハマナツメ群落を調査して得られた知見」小川葉奈、脇祐也、鳥羽高史、野中真優（三重県立尾鷲高等学校・自然環境研究部・部員）、前義典、山本和彦（三重県立尾鷲高等学校・自然環境研究部・顧問）「埼玉県所沢市北野の谷戸の昆虫相～水田・畑・雑木林の比較～」千代田創真、関口伸一（海城中学校・高等学校・生物部）

「エコボールの研究」浅原雄、佐藤優多、原田拓実（静岡県立掛川西高等学校・自然科学部）

【ナチュラル・ヒストリー賞】

「サツマイモとジャガイモのβアミラーゼについて」保科珠季（横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校・サイエンスリテラシー）

「クマムシの研究」佐藤友規、長谷川巧、松浦寿彦、松浦彰彦、松下保男（静岡県立掛川西高等学校）

「外来種タカサゴユリの分布特性と繁殖特性」藤田純歌、相曾優香、山下美生、山下小百合（静岡県立浜松湖東高等学校・天文生物部）

「泉北高校ビオトープ池の完成後7年間の生物と環境の変遷」江崎雄大、磯部賢太、岡山達哉（大阪府立泉北高等学校・サイエンス部）

「ヒラタクワガタのDNA解析」倉田裕史（横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校・理科調査研究部）

「浜松市西区における外来種メリケンソウ」荒熊理沙、新村舞瑚（静岡県立浜松湖東高等学校・天文生物部）

「アユが川をきれいにする」山田寛之、小海桂子（和歌山県立桐蔭高等学校）

「オオカナダモの光合成によるpHの上昇について」藤井裕也、秋山侑佑、谷俊介、新井達也、渡邊康太、堀池弘樹、望月星哉（静岡県立静岡農業高等学校・生物部）、篠田聖児（静岡県立静岡農業高等学校・教諭）

「カメムシ個体群の経時変化」田中良紀、早川弘華、西村明洋（立命館慶祥中学校・高等学校）

「侵略的外来種オオフサモの驚異」村崎瑠衣、森下結衣、グエン・ティタム、油井美佳（静岡県立浜松湖東高等学校・天文生物部）

「ンジボタルのDNA解析」五孝寛（横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校・理科調査研究部）

「カワニナを通して考える地域の生態系～伊自良川の実態に学ぶ～」杉山高大、長野紗弓、古屋峻明、池田伊吹、木内恒聡、鵜飼裕紀、松雪貴哉、浅野将太、仲上裕輝、奥村奈津実（岐阜県立岐山高等学校・生物部）

Ⅲ. 書評依頼図書（2012年9月～2013年4月）

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はEメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局（office@mail.esj.ne.jp）までお知らせ下さい。なお、書評は1年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. コリン・タッジ著・黒沢令子訳「鳥 優美と神秘、鳥類の多様な形態と習性」（2012）509pp.（株）シーエムシー出版 ISBN:978-4-7813-0522-6
2. 渡辺守著「生態学のレッスン 身近な言葉から学ぶ」（2012）188pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-063334-5
3. 阿部健一編「生物多様性 子供たちにどう伝えるか」（2012）208pp. 昭和堂 ISBN:978-4-8122-1119-9
4. S. Nakano・T. Yahara・T. Nakashizuka Editors「Ecological Research Monographs The Biodiversity Observation Network in the Asia-Pacific Region」（2012）480pp. Springer ISBN:978-4-431-54031-1
5. N. Yamamura・N. Fujita・A. Maekawa Editors「Ecological Research Monographs The Mongolian Ecosystem Network」（2012）320pp. Springer ISBN:978-4-431-54051-9
6. 亀崎直樹編「ウミガメの自然誌」（2012）310pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-066161-4
7. 財団法人 日本学術協力財団「学術会議叢書 19 生殖補助医療と法」（2012）208pp. 財団法人 日本学術協力財団 ISBN:978-4-999498948
8. 京都大学フィールド科学教育研究センター編・向井宏監修「森と海をむすぶ川 沿岸域再生のために」（2012）338pp. 京都大学学術出版会 ISBN:978-4-87698-575-3
9. 森田竜義編著「帰化植物の自然史 侵略と攪乱の生態学」（2012）300pp. 北海道大学出版会 ISBN:978-4-8329-8204-8
10. 松田裕之著「海の保全生態学」（2012）222pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060194-8
11. 日本生態学会編 森長真一・工藤洋担当編集「現代

- の生態学 7 エコゲノミクス—遺伝子からみた適応—」(2012) 306pp. 共立出版 (株) ISBN:978-4-320-05740-1
12. 盛口満著「生き物の描き方 自然観察の技」(2012) 162pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4130-63335-2
 13. 秋山道雄・澤井健二・三野徹編著「環境用水—その成立条件と持続可能性」(2012) 198pp. 技報堂出版 ISBN:978-4-7655-3458-1
 14. 川那部浩哉・水野信彦監修 中村太士編「河川生態学」(2013) 356pp. (株) 講談社 ISBN:978-4-06-155232-6
 15. 松浦健二著「シロアリ—女王様、その手がありましたか!」(2013) 120pp. 岩波書店 ISBN:978-4-00-029602-1
 16. 島野智之著「ダニ・マニア」(2012) 216pp. (株) 八坂書房 ISBN:978-4-89694-143-2
 17. 桜井泰憲・大島慶一郎・大泰司紀之編著「オホツクの生態系とその保全」(2013) 500pp. 北海道大学出版会 ISBN:978-4-8329-8208-6
 18. 前迫ゆり編「世界遺産春日山原始林—照葉樹林とシカをめぐる生態と文化—」(2013) 256pp. ナカニシヤ出版 ISBN:978-4-7795-0744-1
 19. 市川昌広・祖田亮次・内藤大輔編「ボルネオの<里>の環境学 変貌する熱帯林と先住民の知」(2013) 230pp. 昭和堂 ISBN:978-4-8122-1319-3
 20. 四方篤著 焼畑の潜在力「アフリカ熱帯雨林の農業生態誌」(2013) 214pp. 昭和堂 ISBN:978-4-8122-1306-3
 21. 伊藤元己著「植物分類学」(2013) 146pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-062221-9
 22. ダニエル・チャモヴィッツ著・矢野真千子訳「植物はそこまで知っている—感覚に満ちた世界に生きる植物たち—」(2013) 192pp. 河出書房新社 ISBN:978-4-309-25280-3

Ⅳ. 寄贈図書

1. 「うみうし通信 No.77」(2012) 12pp. 公益財団法人水産無脊椎動物研究所
2. 「海洋地質図 No.77」(2012) 独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター
3. 「第35回公益財団法人山田科学振興財団 事業報告書 2011年度」(2012) 120pp. 公益財団法人山田科学振興財団
4. 「第62回東レ科学振興科学講演会記録」(2012) 48pp. 公益財団法人東レ科学振興会
5. 「北海道爬虫類両棲類研究報告」(2012) 52pp. 北海道爬虫類両棲類研究会
6. 「ハーブソン Hokkaido2012 結果報告」(2012) 20pp. 北海道爬虫類両棲類研究会
7. 「Ocean Breeze 東京大学大気海洋研究所ニュースレター」(2013) 12pp. 東京大学大気海洋研究所
8. 「CIC NEWSLETTER No.10」(2012) 16pp. 東京大学大気海洋研究所
9. 「海洋地質図 No.74.75.76.78」(2012) 独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター

10. 「テクノオーシャン 2012 Summary Report」(2012) 28pp. Techno-Ocean2012 事務局
11. 「多摩川 第137号」(2013) 32pp. 公益財団法人とうきゅう環境財団
12. 「草と緑」(2012) 45pp. 特定非営利活動法人 緑地雑草科学研究所
13. 「公園緑地と雑草」(2012) 64pp. 特定非営利活動法人 緑地雑草科学研究所
14. 「緑地雑草管理における地被植物と植物系発育材の活用:現状と将来」(2012) 44pp. 特定非営利活動法人 緑地雑草科学研究所
15. 「国土技術政策総合研究所資料 国土交通省国土技術政策総合研究所緑化生態研究室報告書第27集」(2013) 180pp. 国土交通省国土技術政策総合研究所
16. 「東京大学大気海洋研究所 50年史 1962-2012年」(2013) 350pp. 東京大学大気海洋研究所
17. 「Journal of Environmental Information Science Vol.41, No.5」(2013) 142pp. 環境科学情報センター
18. 「こうえいフォーラム No.21」(2013) 60pp. 日本工営株式会社 技術委員会
19. 「うみうし通信 No.78」(2013) 12pp. 公益財団法人水産無脊椎動物研究所
20. 「果樹研究所研究報告第15号」(2013) 54pp. 独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構果樹研究所
21. 「第28回国際生物学賞記録」(2013) 36pp. 独立行政法人 日本学術振興会国際生物学賞委員会

V. 交換雑誌目録 (2013年4月現在)

1. Annales Botanici Fennici
2. Archiv fur Molluskenkunde
3. Biodiversity Science
4. BREVIORA
5. Chinese Journal of Applied Ecology
6. Chinese Journal of Ecology
7. Entomologische Berichten
8. Journal of Plant Ecology
9. Journal of Taiwan Fisheries Research
10. MICRONESICA
11. ORSIS
12. Polish Journal of Ecology
13. Proceeding of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia
14. Scientia Marina
15. Sichuan Alpine Ecology Study
16. SPIXIANA
17. Systematics and biodiversity
18. The BIOLOGICAL BULLETIN
19. The Botanical Review
20. Tropical Ecology
21. ЭКОЛОГИЯ
22. Хабарлары Цэвесмця

お 知 ら せ

1. 公募

日本生態学会に寄せられた公募について、①対象、②助成又は賞などの内容、③応募締め切り、④申し込み・問い合わせ先をお知らせします。

(1) 2013 年度 信州フィールド科学賞

- ①山岳地域におけるフィールド・ワークを基本として研究している若手研究者（2013 年度末で 35 才以下）を対象とします。研究対象や分野は問いません。
- ②賞状および副賞 10 万円
- ③2013 年 6 月 28 日
- ④信州大学山岳科学総合研究所運営支援チーム
〒 390-8621 松本市旭 3-1-1
電話：0263-37-2432 FAX：0263-37-2438

(2) 2013 年度 信州フィールド科学奨励賞

- ①Ⅰ種：陸域の自然・文化を対象にフィールド・ワークを行っている高校生を対象とします。
Ⅱ種：「山」におけるフィールド・ワークに基づいてまとめられた大学の（過去 3 年間に提出された）卒業論文を対象とします。
- ②賞状および副賞 5 万円
- ③2013 年 6 月 28 日
- ④信州大学山岳科学総合研究所運営支援チーム
〒 390-8621 松本市旭 3-1-1
電話：0263-37-2432 FAX：0263-37-2438

(3) 公益財団法人住友財団 2013 年度環境研究助成

- ①一般研究：環境に関する研究（分野は問いません。）
課題研究：「持続可能な社会への着実な転換を可能にする方策に関する研究」
- ②一般研究：9,000 万円（1 件当たり最大 500 万円）
課題研究：2,000 万円（1 件当たり最大 1,000 万円）
- ③2013 年 6 月 28 日（金）
※ E-mail の締切は 6 月 20 日（木）となっております。
ご注意ください。
- ④〒 105-0012 東京都港区芝大門 1-12-16 住友芝大門ビル 2 号館
公益財団法人 住友財団
TEL：03-5473-0161 FAX：03-5473-8471

(4) 公益財団法人住友財団 2013 年度基礎科学研究助成

- ①この助成は、重要でありながら研究資金が不十分とされている基礎科学研究、とりわけ新しい発想が期待される若手研究者による萌芽的な研究に対する支援を行う。理学（数学、物理学、化学、生物学）の各分野及びこれらの複数にまたがる分野の基礎研究で萌芽的な研究対象。
- ②総額 1 億 7,000 万円（1 件当たり最大 500 万円）
- ③2013 年 6 月 28 日（金）
※ E-mail の締切は 6 月 20 日（木）となっております。

ご注意ください。

- ④〒 105-0012 東京都港区芝大門 1-12-16 住友芝大門ビル 2 号館
公益財団法人 住友財団
TEL：03-5473-0161 FAX：03-5473-8471

(5) 公益財団法人ロッセ財団研究者育成助成（ロッセ重光学術賞）

- ①「食と健康」の分野において、優れた若手研究者がわが国トップクラスの研究者として成長することを願ひ、それにふさわしい支援を行う（30～40 歳まで）
- ②総額 7,500 万円（1,500 万円×5 年間）
- ③平成 25 年 7 月 1 日（月）～8 月 30 日（金）
- ④〒 160-0023 東京都新宿区西新宿 3-20-1
公益財団法人ロッセ財団

(6) 公益財団法人ロッセ財団奨励研究助成

- ①「食と健康」の分野において、独創的・先端的な研究に専念する優れた若手研究者を対象とした助成制度です。自然科学、人文・社会科学の広域分野からの応募が可能
- ②300 万円（上限）を 1 年間支給
- ③平成 25 年 7 月 1 日（月）～8 月 30 日（金）
- ④〒 160-0023 東京都新宿区西新宿 3-20-1
公益財団法人ロッセ財団

(7) 第 5 回（平成 25 年度）とうきゅう環境財団社会貢献学術賞

- ①日本の環境分野において学術的、社会的に特に顕著な業績を挙げた研究者
- ②賞状および賞金 50 万円
- ③平成 25 年 8 月 31 日（必着）
- ④公益財団法人とうきゅう環境財団
〒 150-0002 東京都渋谷区渋谷 1-16-14 渋谷地下鉄ビル 8 階
TEL：03-3400-9142

(8) 平成 25 年度東レ科学技術賞

- ①(1) 学術上の業績が顕著な方
(2) 学術上重要な発見をした方
(3) 効果が大きい重要な発明をした方
(4) 技術上重要な問題を解決して、技術の進歩に大きく貢献した方
- ②1 件につき賞状、金メダルおよび賞金 500 万円
- ③平成 25 年 10 月 10 日（木）必着
- ④日本生態学会事務局（学会推薦が必要です）

(9) 平成 25 年度東レ科学技術研究助成

- ①当学会に関する分野で国内の研究機関において、自らのアイデアで萌芽的研究に従事しており、かつ今後の研究の成果が科学技術の進歩、発展に貢献するところが大きいと考えられる若手研究者（原則として推薦時 45 歳以下）。本助成が重要な研究費と位置づけられ、これにより申請研究が格段に進展すると期待されるこ

とが要件

- ②総額1億3千万円。1件最高3千万円程度まで、計10件程度。
- ③平成25年10月10日(木)必着
- ④日本生態学会事務局(学会推薦が必要です)

書 評

J. ハート著・小沼通二/蛭名邦禎訳 (2010)「環境問題の数理科学入門」シュブリンガー・ジャパン 300pp. ISBN:978-4-431-10085-0 定価2700円(税別)

本書は、著者ハートがエル大学とカリフォルニア大学バークレー校で行った「地球環境問題の定量的側面」という講義をもとに書き下ろした教科書であり、訳書のタイトルある「数理科学」という表現はやや大げさである。原題「Consider a Spherical Cow」の直訳「球形の牛を考えよう」のほうがピンとくる内容である。要は、できるだけ身近な情報のみをもとに、細かなことはさて置いて(モデル化し)、問題の本質を数値的に評価してみようという精神である。そのために、環境科学に関連する44個の具体例を通して簡単な数学を用いて数値的な結論に達するまでの道程や考え方が記されている。

原著は20年以上前出版され、資源枯渇問題、食糧問題、大気汚染、酸性雨、環境ホルモン、温暖化などの環境問題を念頭に置いており、米国の1980年の課題の設定やデータが多い。訳者あとがきにもあるように、日本の場合はどうか、米国の30年後の現在はどうか、比較しながら、考えながら読むとよい。目次は、第1章「ウォーミングアップ」、第2章「環境科学の道具箱」、第3章「封筒の裏を越えて」となっており、第1章から順に読み進むべきである。そして、深入りせず、ここで扱う環境問題の感覚を知ろうとする場合は、2章までを計算など気にせず読むだけでも十分参考になる。第3章はじっくりと読んだり、考えたりするべき内容である。多くの注釈([原注]、[訳注])により、本文以外の様々な関連事項や読み飛ばし方が示されている。

以下では、あまり専門的なことに立ち入らず、各章ごとに評者の思うところを記していく。

第1章「ウォーミングアップ」では、靴直し職人の計数、分子の計測、古代隕石のサイズ、化石燃料資源の消尽、人口の過密化、私たちが食べる野菜、石炭の中の硫黄など、中学生レベルの数学でも十分な知識のみを使い、特にものごとの比較において、単位の換算や概数の概念が重要であるという感覚を養う。まさに、「球形の牛を考えよう」という仮定のもとに、シンプルに本質的な点を逃さず考えていくべきことが重要であるという感覚を、感じる事ができて気分がよくなる。

物理学出身である著者は、もちろん意識していたであろうが、概数の推定として、物理学者にとっては「フェルミ推計」がよく知られている。その一例として、銀河系に存在する文明を持つ星の数を表すドレークの方程式、理想の女性に出会う確率を評価したバッカスの方

式が有名である。深刻さや対象は異なるが、これらは本章と同じ精神のものである。評者も講義では、日本にある理容店や畳屋の数、茶碗一杯のごはん粒と生態系との関係などを課題にしたことがある。

第2章「環境科学の道具箱」では、定常ボックスモデルと滞留時間熱力学とエネルギーの伝達、化学反応と平衡、非定常状態ボックスモデルなどの話をフローとその中でストックのバランスを評価することで考察する。フロー(流れるもの)としては考えられる基本的なものは、物質、エネルギーである。物質なら、炭素、水、二酸化硫黄、エタン、リン、アルミニウム、人口の場合などが、エネルギーなら、その存在形態として、力学、熱、化学、光などが考えられる。

「熱力学とエネルギーの伝達」では6つの熱力学の問題が取り上げられている。要は、熱平衡状態の熱力学を身近な現象に用いて、エネルギー問題を考えている。この中で、原発の発電効率や生態系の環境問題はあるが、放射能汚染に関する環境問題やコスト問題は扱われていない。

「化学反応」では、化学反応の平衡状態での物質の濃度変化を、化石燃料の燃焼によるCO₂濃度、H₂O濃度の増加炭素濃度の評価、または河川や湖での硝化過程での酸性度の評価などを行うことにより、を行っている。化学の分野でいえば、物理化学の実践的演習問題といえる。

「非定常状態」では、ストックの増大や減少をそれを支配する力学方程式により見積もるものである。ここで取り上げている人口増大、資源の消尽などは非定常に変化していくもので、環境容量との比較が重要な意味を持つ。「環境容量」という言葉は本書の用語説明にも載っているが、半世紀近く前に生まれた概念であり、CO₂固定容量、クーリング容量、生活容量、水資源容量、木材資源容量などの生活地域の潜在性を示す。[大西文秀著「環境容量からみた日本の未来可能性」(大阪公立大学共同出版会2011)参照]

第3章「封筒の裏を越えて」では、生物地球化学、気候学、生物集団の生き残りなどを第1章や第2章で準備した道具を十分に用いて考察している。著者が『序』で「モデルの方があなたに対し問いを発するようになる」と言うように、歯ごたえのある内容の応用問題であり、読み飛ばすことはできない。この第3章で初めて、数学に関しては、大学の教養程度の線形代数、微分積分学、微分方程式の知識が必要な計算が登場するが、技術的なことと本質的な内容を混同せずに読み進むことが重要であろう。さらに、地球化学、気象学、生物学など多様な専門分野にわたっていること自体が環境問題の特徴ともいえる。一つひとつは高度なものではなく、むしろ、物理、化学、生物、地学という高校の理科の知識で十分理解できる内容である。また、そのために役立つ基礎データ集、用語解説がついているので、活用しながら読むことができる。以下に、詳細な項目を挙げておく。

『生物地球化学』では、「酸性雨によって土壌から溶け出すアルミニウムイオンの量は?」「海水中の炭素同位体濃度の分布から溶存無機炭素の平均滞留時間と大気海洋間の炭素交換速度を求めよ」「ある湖に無機リンが突

然投入された場合、バイオマス中のリンはどのような振動を受けるか？」を考察する。地球表面温度などを考える場合、3種の熱の移動形態、熱伝導、赤外線放射、対流などについての物理的知識が役立つ。熱伝導はフーリエ則、放射はシュテファン-ボルツマン則などに従う。また、リン循環に関しては、様々なリンの量の変動に関する非線形微分方程式の解の振る舞いを評価しているの、線形安定解析などの基本的知識があると読み進めやすい。

『気象学』では、「実際の地球の平均表面気温は？」「大気中の二酸化炭素濃度が2倍になった場合、温室効果による昇温はどの程度か？」「地球の陸地面積の20%が森林から砂漠に変わった場合、地球の平均気温はどの程度変化するか？」「ヒートアイランド現象による昇温はどの程度か？」など現在もなお詳細な解を求め研究が続けられている全球的気候問題を取り上げている。

『生物学』では、「ある生物集団を糧としている場合、持続可能な最大収穫率とそれを決定するパラメータは？」「生物濃縮をモデル化せよ」「ハイウェー上に横たわる野ウサギの死骸数から轢き殺された野ウサギが属する群れの個体数密度を推定せよ」などがロトカー-ボルテラ方程式やロジスティック方程式なども用いて評価している。これらの内容を、身近な現在の問題である水俣病(水銀汚染)や農薬によるアキアカネの減少、水溶性アリ退治薬によるミツバチの減少などへ応用することもできるであろう。

最後に、熱統計物理学、特に、エントロピーという視点で環境問題を論じている本として、勝木渥著「物理学に基づく環境の基礎理論」(海鳴社 1999)も、本書に対する相補的なものとして読むことを薦める。既に、「JSMB Newsletter」(日本数理生物学会)、「天気」(日本気象学会)、「日本物理学会誌」(日本物理学会)、などにも本書の書評が出ているので参考になるであろう。

(山田物理研究所 山田弘明)

日本ベントス学会編 (2012)「干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック」東海大学出版会 306pp. ISBN:978-4-486-01943-5 定価4800円(税別)

1972年にローマクラブが地球環境の危機を「成長の限界」として宣言して以来、環境と開発に関する国連のリオ宣言(1992)など、地球環境の悪化と対策が国際的な政治課題にもなってきた。その流れの中で同時に生物多様性条約(CBD)が締結される。しかしながら日本政府の対応は、国際的な流れから遅れがちだった。経済を優先する政治の中で環境庁が発足したのは、1971年。それも引き続き公害によって人々の健康や命が具体的な危機に陥った末のことであった。そして環境庁が環境省に昇格したのは、2001年だった。21世紀になって初めて、国際的な地球環境問題の潮流により追いつく体制ができたのだった。CBDに関しては、加盟(1993)の2年後、条約に書かれている加盟国の義務である生物多様性保護のための国家戦略を定めたが、それは各省庁の行っている現状の政策をほとんどそのまま並列しただけのものであった。そこに書かれている保全戦略の多くが、むしろ生物多様性の保全には結びつかないと思えるものが多かった。

2010年、第10回CBD締約国会議(COP10)が日本(名古屋)で開かれたことをきっかけに、ようやく日本政府も環境省を中心にCBDに積極的に関わろうとし始めている。日本の動植物のレッドデータブックも改訂を重ね、ほぼ完成に近づいている。それにもかかわらず、海洋生物に関するこれまでの政府の対応は、陸上動植物に比べて大幅に遅れている。レッドデータブックでも、海洋生物はほんの一部しか作られていない。河川生物の一部として河口部汽水域の生物については、レッドデータブックに搭載されたが、海洋生物の国のレッドデータブックは未だ存在しない。地方自治体の一部で海洋生物が取り上げられているものもあるが、それもきわめて珍しい例に過ぎない。

海洋生物のレッドデータブックが作られていない大きな理由の一つが、環境庁ができるときに、水産庁との間に海洋生物は扱わないという暗黙の了解があったという話しが、まことしやかに流れている。環境庁発足後の動きをみると、これが単なる噂だけではないことを認識できる。水産庁は、1998年に「日本の希少な野生水生生物に関するデータブック」という海洋生物の実質的なレッドデータブックを発表した。しかし、それは主要な種について書かれているばかりで、海洋生物を網羅したものでは無かった。とくに漁獲対象である魚類や甲殻類、軟体動物については、慎重に外している感じが強い。

このような政府の対応の遅さに、日本ベントス学会では、海洋生物のレッドデータブック作成を環境省に強く要請してきた。それにもかかわらず環境省の海洋生物への対応はなかなか進まなかったため、日本ベントス学会の和田恵次奈良女子大教授らは、独自に日本全国の干潟生物に関して、研究者らにアンケートを採るなどして、独自に干潟生物のとりまとめを行い(和田ほか、1996)、政府の取り組みを促した。

そして、環境省がようやく海洋生物のレッドデータブック作りに取りかかったころ、本書が日本ベントス学会自然環境保全委員会の手によって刊行された。本書は、当初1996年に刊行された和田らの報告を補完する目的で日本ベントス学会環境保全委員会によって計画されたが、その後、内容を一新して、環境省が作らないレッドデータブックを先んじて作ることを目的とした。もっとも、内容を干潟の生物に限ったことから、海洋生物全体のレッドデータブックには届かなかったが、浅海の上部に棲む多くの海洋生物のレッドデータブックとして、これまでにない充実したものになっている。この書には、日本全国の干潟に生息する魚類など脊椎動物を除く底生動物の中から、絶滅の危機に近く保全されるべき651種が記載されている。その内訳は、軟体動物腹足類263種、二枚貝199種、節足動物138種、環形動物21種、その他26種である。

本書の特徴は、レッドデータブックといいながらも、図鑑としての機能を十分に持たせたところであろう。おそらくその理由は、生残が危なくなっている種の多くが、既存のベントスの図鑑に漏れていることによるのであろう。希少種や絶滅危惧種の多くが、これまでの図鑑では知ることができない種でもある。ベントス図鑑も、これ

まで全体を網羅した図鑑は作られていない。いまだにベントスの同定には、北隆館の新日本動物図鑑が使われているが、この図鑑では記載されている種は日本に分布している種数のおそらく1%以下ではないか。そのような中で、この図鑑は、レッドデータブックである以上、すべての種を含むわけにはいかないが、これまで図鑑に記載されなかった多くの希少種や絶滅危惧種が色彩鮮やかな生きた標本の写真も含めて載せられ、詳しい記載がされている。われわれは干潟ベントスのレッドデータブックのみならず、新しい図鑑を手に入れることができたのである。

著者は、29名の多き上る。編集者7名、23名の作業部会員、そして執筆者が29名である。これだけの専門家を動員して作られたレッドデータブックであり、絶滅危惧種図鑑である。その努力は、計り知れない。計画から完成までに7年の歳月を費やしている。その努力と根気を賞賛したい。それも干潟の生き物がいなくなっていくことを現場で実感してきた研究者の干潟保全への強い思いと志が、本書を完成させたと言って良いであろう。

もちろんレッドデータブックである本書の性格上、当然普通種の記載はない。その点では、図鑑という意味で不足している。二つの機能を狙ったために、両方を満足させることは当然できなかった。そのために、図鑑として本書を使う人は、普通種が載っていないことを頭に置いて使うべきである。本書は、別の図鑑と同時に、両方を見ながら使うことが推奨されるだろう。その意味でも、本来のベントス図鑑の完成が望まれる。それと同時に、環境省によって海洋生物全体のレッドデータブックの完成・発表が一日も早くなされることを期待したい。

東海大学出版会の装丁も、本書にふさわしく重厚で美しい。机上に飾ることもできそう。定価がやや高価であるが、図鑑が一般に高価であることを考えると、妥当とも言える。ぜひ多くの人がこの本を読まれ、または鑑賞され、干潟に生きる動物たちに思いをはせていただき、そしてその危機的状況についても理解していただければと思う。海が人々の生活から遠ざかってしまったこともあり、干潟の現状を知る人も少なくなってしまった。

本書については、賞賛の言葉がつい口をついて出てくるが、一点だけ不満を述べておこう。それは、干潟の現状について述べた部分で、干潟の重要性や干潟生物の減少などについて書かれてはいるが、残念ながら干潟そのものの危機的状態について書かれていない。干潟の生物の危機は、干潟そのものの危機と分かちがたく結びついている。その干潟の現状が数値を元に書かれていると、もっと干潟生態系の危機が説得力を持って実感してもらえただろう。

まえがきの「日本の干潟の現状」に書かれているように、本書の刊行を機会に干潟の生き物を守る機運が起こり、少しでも本書に書かれている種がレッドデータリストから外される日が来ることを願っている。

引用文献

日本水産資源保護協会：「日本の希少な野生水生生物に関するデータブック（水産庁編）」pp.437（1998）

和田恵次ほか：「日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状」WWF-Japan サイエンスレポート vol.3, pp.1-181（1996）

（京都大学学際融合教育研究推進センター
森里海連環学教育ユニット 向井 宏）

M.Cain/C.Yoon/A.Singh-Cundy 著・上村慎治監訳
(2012)「ケイン基礎生物学」東京化学同人 504pp.
ISBN:978-4-8079-0770-0 定価 6100 円（税別）

評者は勤務先の大学の理学部で1年生向けの「生物学概論」という授業を担当しているため、本書を手にとった。本書は Discover Biology という教科書の抜粋版 Discover Biology Core Topics の翻訳である。いずれも原書は第4版まで重ねられているそうである。Discover Biology の第2版は『ケイン生物学』として同じ東京化学同人から翻訳出版されている（石川統監訳）。

本書は以下のような5部25章構成である。

第I部 生命の多様性（1～3章、計62ページ）

第II部 細胞：生命の基本単位（4～9章、計111ページ）

第III部 遺伝（10～15章、計103ページ）

第IV部 進化（16～19章、計72ページ）

第V部 環境との相互作用（20～25章、計92ページ）

生態学と関係の深い第I部・第IV部・第V部が全体の約半分を占める。第II部・第III部の内容は、生態学を学ぶ上でも知っておくべき必要最小限のミクロ生物学（個体より小さな生物学的階層を扱う生物学）の内容を含んでいるが、親本にあたる『ケイン生物学』では扱われている生理学・発生学・神経科学・免疫学などの内容は含まれない（「訳者まえがき」による）。このように、ミクロ生物学から個体以上の生物学的階層を扱う生態学までを一通り扱い、しかも生態学に比重をかけて教えるという目的に適した教科書となっている。高校では逆にミクロ生物学を中心にし、生態学分野は付けたし程度というのが普通だろうから、そういう意味ではいかにも大学の教科書らしい。

ほとんど全ページにカラーのきれいな図や写真が使われているのは大きな魅力である。取り上げる話題も人間社会に関わるものを選び、ボックスやコラムを頻繁に設けて読者をあきさせない工夫もしている。一例をあげると、系統樹の説明の導入に英国王室の家系図を用い、章末の「学習したことに応用」でアルプスで発見されたアイスマンの話題を取り上げている。訳者はまえがきで、高校生、自然科学以外を専攻する大学生、一般の社会人にも本書を読んでもらえることを期待しているが、無茶な期待ではないと感じた。私自身、ミクロ生物学は大学学部生の時に学んだきりなので、本書を読むのはよい「リハビリ」になると思われた。

以上のように本書は厳選された内容だけからなるが、それでも日本の大学で一般的な、半年間15回からなる授業では全部は教え切れない分量であろう。全部で25章あるので、1日1章ずつでは時間が足りない。本書をテキストにするならば、授業では一部を扱い、扱いきれない部分は学生に自習してもらうことになるだろう。上

述のように学生が自習しやすい工夫は色々されている。ただし、内容が充実しているだけに価格は高い。大学図書館に購入してもらい、学生には参考書として紹介するというのが現実的な活用法かもしれない。

(鹿児島大学理学部地球環境学科 相場慎一郎)

S.Nakano・T.Yahara・T.Nakashizuka Editors (2012)
『The biodiversity observation network in the Asia-Pacific Region』Springer 479pp. ISBN:978-4-431-54031-1

2011年からSpringerより出版されているEcological Research Monographs シリーズの第4冊目(Springerのウェブサイトによる)。本シリーズは巖佐庸日本生態学会元会長がSeries Editorを務めておられ、日本(およびアジア太平洋地域?)で行われている研究を世界に向けて発信するという趣旨で始められたのではなかったかと思う。本書も含め、これまで出版された6冊(2013年1月末現在)は、いずれも日本生態学会で中心的に活動されている方々が著者または編者となっている。

本書出版の背景をたどれば、地球全体あるいは世界各地で生物多様性が急速に失われつつあることへの懸念が国際社会で高まっていることに行き着く。「biodiversity」は、頻繁に使うにはまだるっこい「biological diversity」の短縮形である。短縮形が市民権を得るきっかけとなったのが、1986年にワシントンで米国科学アカデミーとスミソニアン研究所の後援により開催された「生物多様性フォーラム」である。1988年にはフォーラムの内容は、E. O. Wilsonが編者の論文集『Biodiversity』として出版された。そのまえがきによると、フォーラムの題名として短縮形を導入したのは、W. G. Rosenである。厳密にはフォーラムの英名は「National Forum of BioDiversity」とDが大文字になっていて、「biodiversity」が「biological diversity」の短縮形であることをはっきり示している。『Biodiversity』の表紙でも、全部大文字で書かれた表題のうち、BとともにDが赤い縁どりで区別されている。『Biodiversity』所収の論文の表題を見ると、短縮しない形や「biotic diversity」という中間形も使われており、短縮形になじめない研究者がいたことを示唆する。1992年には、地球サミットで「生物多様性条約」が採択されたが、その英名は「Convention on Biological Diversity」であり、短縮形が国際社会に完全に受け入れられたとは言えなかった。なお、Wilsonの日本語訳(『生命の多様性』)もされている1992年の著書の題名は『Diversity of Life』である。

生物多様性は今や科学の問題である以上に社会・政治問題である。国連の定めた「国際生物多様性年」である2010年に、生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が名古屋市で開催されたことは記憶に新しい。「国際生物多様性年」の英名は「International Year of Biodiversity」であり、biodiversityという語が完全に定着したことを示している。科学者は社会に養ってもらっている場合がほとんどなので、可能ならば社会の要請に応じた研究をしていくのが望ましい。逆に言えば(身も蓋もない話をす

れば?)、社会の要請に答えるという意義付けをしたほうが研究予算を獲得しやすいということになる。COP10に先立つ2009年12月には、アジア太平洋地域での生物多様性研究を振興していくことを目指して「アジア太平洋地域生物多様性観測ネットワーク」(Asia-Pacific Biodiversity Observation Network、略称AP-BON)が組織されており、本書の編者たちは日本におけるAP-BONの推進者である。これらの背景を反映して、本書にはToward further development of monitoring という副題がつけられている。

本書は以下の5部、計31編の論文からなる。

- Part I General introduction 3 編
- Part II Networks for monitoring and research on biodiversity in the Asia-Pacific region 10 編
- Part III Establishing a biodiversity network 5 編
- Part IV New methods and analyses for biodiversity studies 6 編
- Part V Biodiversity and ecosystem services 7 編

扱われている事例は日本のものが一番多い(9編)が、フィリピン・スリランカ・メコン川流域・東～東南アジア(各1編)、タイ・中国・韓国・東南アジア全域(各2編)、インドネシア(3編)、アジア太平洋地域全体(7編)など、アジア太平洋地域の様々な場所が様々な空間スケールで取り上げられている。ただし、オセアニアやインド以西のアジアの事例は見当たらなかった。対象とされる生態系も森林・湖沼・河川・農耕地など多様である。特定の分類群(維管束植物・シダ植物など)だけを扱っている論文もあるが、それぞれの生態系に見られる生物群を網羅的にあつかっている論文のほうが多い。前者の中では、特に淡水性魚類(6編)についての論文が多い。海洋生態系を本格的に扱っているのは1編しかなく、その他の論文はすべて陸上または陸水生生態系(つまり、広義の陸域生態系)を扱っている。

評者は東南アジアや日本の森林を研究しているので、フィリピンやインドネシアの森林調査区に基づく論文(Amoroso および Simbolon et al.)、日本の森林調査区のデータベースの解説(Niiyama et al.)、種同定の助けとなるDNAバーコーディングの解説(Kato et al.)、リモートセンシングと地上観測の融合についての論文(Muraoka et al.)、インドネシア泥炭湿地林における生態系研究(Osaki et al.)などが特に興味深かった。評者の専門外の分野では、韓国の水田生態系(Bang et al.)やスリランカのVillage tank system(農村ため池生態系?)と呼ばれる農地生態系(里山生態系?)についての論文(Marambe et al.)が、日本の農地生態系とのよい比較材料になりそうだと感じた。

以上のように、読者は本書によりアジア太平洋地域でおこなわれている生物多様性に関する最近の生態学的研究を概観できる。本書は幅広い読者に有用な情報を含んでおり、特に陸上植物・森林・魚類・陸水生生態系の研究者には有益だろう。もちろん予算獲得文書作成のための基礎知識を身につけようとする研究者すべてにとっても役立つ(?)はずである。

(鹿児島大学理学部地球環境学科 相場慎一郎)

・公募カレンダー

例年学会事務局に送付される学術賞、研究助成、共同研究などの公募を昨年の締切日順にまとめました。

詳細については、学会事務局あるいは各団体にお問い合わせ下さい。

名称又は種類	授賞又は助成団体	2012 年締切 (*印: 2013 年締切)
研究・活動助成	公益財団法人 とうきゅう環境財団 http://www.tokyuenv.or.jp/invite	1 月 15 日 *
藤原賞	財団法人 藤原科学財団 http://www.fujizai.or.jp	1 月 31 日 *
自然科学研究助成	財団法人 三菱財団 http://www.mitsubishi-zaidan.jp	2 月 4 日 *
研究援助	財団法人 山田科学振興財団 http://www.yamadazaidan.jp	2 月 28 日 *
助成研究者奨励 OM 賞	日本動物学会 http://www.zoology.or.jp/html/01_infopublic/01_index.htm	3 月 29 日 *
コスモス国際賞	花の万博記念コスモス国際賞委員会	4 月 1 日
環境問題研究助成	財団法人 ニッセイ財団 http://www.nihonseimei-zaidan.or.jp	4 月 8 日 *
学術振興会賞	独立行政法人 日本学術振興会 http://www.jsps.go.jp/jsps-prize/index.html	4 月 17 日 *
国際生物学賞	日本学術振興会国際生物学賞委員会 http://www.jsps.go.jp/j-bionom.htm	5 月 17 日 *
生物多様性日本アワード	公益財団法人イオン環境財団 http://www.midoripress-aeon.net/jp/award/index.html	5 月 31 日 *
育志賞	独立行政法人 日本学術振興会 http://www.jsps.go.jp/j-ikushi-prize/index.html	6 月 14 日 *
若年研究助成事業	南方熊楠顕彰会・田辺市 http://www.minakata.org	6 月 30 日 *
フィールド科学賞	信州大学山岳科学総合研究所 http://ims.shinshu-u.ac.jp/	6 月 28 日 *
研究調査助成	財団法人 日本証券奨学財団 http://www.jssf.or.jp	6 月 29 日
文部科学大臣表彰科学賞	文部科学省 http://www.mext.go.jp/b_menu/boshu/index.htm	7 月 17 日
新 LRI	一般社団法人 日本化学工業協会 http://www.j-lri.org/	8 月 17 日
社会貢献学術賞	公益財団法人 とうきゅう環境財団 http://www.tokyuenv.or.jp/invite	8 月 31 日 *
朝日賞	財団法人 朝日新聞文化財団	8 月 31 日
尾瀬賞	財団法人 尾瀬保護財団 http://www.oze-fnd.or.jp/	8 月 31 日
海のフロンティアを拓く 岡村健二賞	テクノオーシャンネットワーク http://www.techno-ocean.com	8 月 31 日
記念基金助成	日本万国博覧会記念機構 http://fond.expo70.or.jp/valuation/explanation.html	9 月 30 日
沖縄研究奨励賞	公益財団法人 沖縄協会 http://homepage3.nifty.com/okinawakyoukai/	9 月 30 日
木原記念財団学術賞	木原記念横浜生命科学振興財団 http://www.kihara.or.jp	9 月 30 日
科学技術賞	東レ科学振興会 http://www.toray.co.jp/tsf/index.html	10 月 10 日 *
研究助成	東レ科学振興会 http://www.toray.co.jp/tsf/index.html	10 月 10 日 *
助成事業	花博記念協会 http://www.expo90.jp	11 月 12 日

環境研究総合推進費	財団法人 日本環境衛生センター http://www.env.go.jp/policy/kenkyu/	11 月 14 日
研究助成	財団法人 鹿島学術振興財団 http://www.kajima-f.or.jp/	11 月 20 日
研究助成	財団法人 下中記念財団 http://www.shimonaka.or.jp/	12 月 10 日
高木仁三郎市民科学基金	特定非営利活動法人 高木仁三郎市民科学基金 http://www.takagifund.org	12 月 10 日

日本生態学会役員一覧

会長	松田 裕之	2012.1 ~ 2013.12
次期会長	齊藤 隆	2014.1 ~ 2015.12
幹事長	陶山 佳久	2013.1 ~ 2014.12
庶務幹事	石田 清	2013.1 ~ 2014.12
会計幹事	牧野 能士	2013.1 ~ 2014.12
会計監事	石田 厚	2011.1 ~ 2013.12
	大澤 晃	2012.1 ~ 2014.12

全国委員会 (2012.1 ~ 2013.12)

全国区	占部城太郎	大手 信人
	粕谷 英一	可知 直毅
	加藤 真	工藤 岳
	酒井 章子	佐竹 暁子
	嶋田 正和	竹中 明夫
	仲岡 雅裕	中静 透
	宮竹 貴久	矢原 徹一
	湯本 貴和	
地方区	野田 隆史 (北海)	黒川 紘子 (東北)
	西廣 淳 (関東)	津田 智 (中部)
	丑丸 敦史 (近畿)	鎌田 磨人 (中四)
	相場慎一郎 (九州)	

常任委員会 (2012.1 ~ 2013.12)

常任委員	足立 直樹	池田 浩明
	半場 祐子	日浦 勉
	中野 伸一	湯本 貴和
	巖佐 庸	大手 信人

会長 (松田)、幹事長 (陶山)、次期会長 (齊藤)
 ER 編集委員長 (可知)、生態学会誌編集委員長 (鈴木)
 保全生態学研究編集委員長 (角野)、将来計画専門委員長 (辻)
 自然保護専門委員長 (矢原)、生態教育専門委員長 (西脇)
 大会企画委員長 (久米)、庶務幹事 (石田)、会計幹事 (牧野)

Ecological Research 編集委員会 (2011.1 ~ 2013.12)

編集委員長 可知 直毅

Managing Editor

鈴木 準一郎

Associate Editors

in-Chief	佐竹 暁子	河田 雅圭
	福井 学	久保田康裕
	正木 隆	宮下 直
	大手 信人	野田 隆史
	寺島 一郎	李 博

Assistant Editor

石井 博

Handling Editors

伴 修平	江口 和洋
原 正利	長谷川雅美
日野 輝明	半場 祐子

市岡 孝郎	岩田 智也
梶 光一	菊沢喜八郎
木庭 啓介	工藤 岳
久米 篤	松尾奈緒子
仲岡 雅裕	大塚 俊之
佐藤 一憲	清和 研二
関島 恒夫	陶山 佳久
金子 信博	日浦 勉
瀧本 岳	梅木 清
藤巻 玲路	高橋 耕一
山口 典之	Eun-Shik Kim
Michael Boots	Barry W. Brook
Min Cao	Jae Chun Choe
Franck Courchamp	Stuart J Davies
Tom J. de Jong	Jingyun Fang
Raghavendra Gadagkar	Rhett D. Harrison
Sun-Kee Hong	Bas W. Ibelings
David W. Inouye	Kari Klanderud
Simon A. Levin	Mathew A. Leibold
Mark D. Scheuerell	Erling J. Solberg
Janne Sundell	Ping Xie
Hoi Sen Yong	Niels.P.R.Anten
Yunting Fang	Jan Frouz
Andrew Lohrer	Zhijun Ma
Stephen D. Sebestyen	Ariel Novoplansky

日本生態学会誌編集委員会 (2011.1 ~ 2013.12)

編集委員長	鈴木 英治	
編集幹事	船越 公威	富山 清升
	川西 基博	
編集委員	池田 浩明	大塚 俊之
	沖津 進	古賀 庸憲
	市岡 孝朗	辻 和希
	中丸 麻由子	小林 剛
	鎌田 直人	津田 みどり
	井鷲 裕司	田中 健太
	北出 理	金尾 滋史
	土田 浩治	岩本 俊孝
	村岡 裕由	永光 輝義
	相場慎一郎	和穎 朗太
	島野 光司	崎尾 均
	磯谷 達宏	

保全生態学研究編集委員会 (2012.1 ~ 2014.12)

編集委員長	角野 康郎	
編集幹事	西廣 淳	三橋 弘宗
編集委員	井口恵一朗	石井 実
	石濱 史子	井上 幹生
	植田 睦之	梅原 徹
	加藤 真	角谷 拓
	河口 洋一	倉本 宣
	小池 文人	小池 裕子
	高田まゆら	高槻 成紀

館野 正樹	中越 信和
長谷川雅美	早矢仕有子
藤井 伸二	増田 理子
山本 智子	湯本 貴和
横溝 裕行	横山 真弓

正木 隆

生態系管理専門委員会 (2012.4 ~ 2014.3)

委員長	竹門 康弘：河川
副委員長	津田 智：草原
幹事	西廣 淳：湖沼
	村上 興正：自然保護
	中越 信和：景観生態
	鎌田 磨人：森林・河川
	高村 典子：湖沼
	角野 康郎：水域
	日鷹 一雅：水田・農耕地
	波田 善夫：湿地
	神田 房行：湿地
	國井 秀伸：汽水・河口
	佐藤 利幸：高山
	矢原 徹一：保全生物学
	中村 太士：河川
	立川 賢一：海洋
	古賀 庸憲：海洋
	椿 宜高：個体群
	塩坂比奈子：普及
	逸見 泰久：海洋
	山田 俊弘：森林
	谷内 茂雄：管理モデル
	鹿野 雄一：河川生態学
	富田 涼都：環境社会学

自然保護専門委員会 (2012.4 ~ 2014.3)

委員長	矢原 徹一：外国渉外
副委員長	加藤 真：海洋
幹事	井田 秀行：中部
地区委員	露崎 史朗：北海
	紺野 康夫：北海
	竹原 明秀：東北
	東 信行：東北
	川上 和人：関東
	吉田 正人：関東・自然公園
	和田 直也：中部
	角野 康郎：近畿
	岩崎 敬二：近畿
	井上 雅仁：中四
	大田 直友：中四
	逸見 泰久：九州
	伊澤 雅子：九州
専門別委員	増沢 武弘：高山・亜高山・MAB
	竹門 康弘：陸水
	清水 善和：島嶼
	久保田康裕：熱帯・亜熱帯
	横畑 泰志：寄生生物
	陶山 佳久：遺伝子
	三浦 慎吾：鳥獣管理
	竹中 千里：大気汚染
	村上 興正：環境行政
	立川 賢一：エコツーリズム
	安溪 遊地：エネルギー問題

将来計画専門委員会 (2012.4 ~ 2014.3)

委員長	辻 和希
	巖佐 庸
	奥田 昇
	粕谷 英一
	五箇 公一
	酒井 章子
	佐竹 暁子
	田中 健太
	仲岡 雅裕
	中丸麻由子
	野田 隆史
	松木佐和子

生態学教育専門委員会 (2012.4 ~ 2014.3)

委員長	西脇 亜也
	山村 靖夫
	浅見 崇比呂
	嶋田 正和
	畑田 彩
	平山 大輔
	牛丸 敦史
	広瀬 祐司
	中井 咲織
	亀田佳代子

大規模長期生態学専門委員会 (2012.4 ~ 2014.3)

委員長	日浦 勉
	伊東 明
	大手 信人
	黒川 紘子
	三枝 信子
	柴田 英昭
	鈴木 智之
	仲岡 雅裕
	中村 誠宏

日本生態学会賞・宮地賞・大島賞・奨励賞選考委員会

粕谷 英一	2011.6 ~ 2013.12
酒井 章子	2011.6 ~ 2013.12
綿貫 豊	2011.6 ~ 2013.12
大手 信人	2012.6 ~ 2014.12
佐竹 暁子	2012.6 ~ 2014.12
正木 隆	2012.6 ~ 2014.12

大会企画委員会

委員長	久米 篤	2012.4 ~ 2014.3
副委員長	吉田 丈人	2013.4 ~ 2015.3
運営部会	川北 篤	2010.4 ~ 2014.3
	北村 俊平	2011.4 ~ 2014.3
	畑田 彩	2009.4 ~ 2014.3
	竹中 明夫	2005.1 ~ 2014.3
	大澤 剛士	2011.4 ~ 2014.3
	唐 艶鴻	2011.4 ~ 2014.3
	森長 真一	2011.4 ~ 2014.3
	黒田 啓行	2012.4 ~ 2015.3
	三木 健	2012.4 ~ 2015.3
	関野 樹	2012.4 ~ 2015.3
	津田 智	2012.4 ~ 2014.3
	辻野 亮	2013.4 ~ 2016.3
	中坪 孝之	2013.4 ~ 2015.3
	山田 俊弘	2013.4 ~ 2015.3

(広報)	小南 陽亮	2012.4 ~ 2014.3	和田 直也	2013.4 ~ 2015.3
	可知 直毅	2009.4 ~ 2014.3		
シンポジウム部会	鈴木 牧	2012.4 ~ 2015.3	山浦 悠一	2012.4 ~ 2014.3
	石田 清	2011.4 ~ 2014.3	丑丸 敦史	2013.4 ~ 2016.3
	稲垣 善之	2011.4 ~ 2014.3	土居 秀行	2013.4 ~ 2016.3
	竹垣 毅	2011.4 ~ 2014.3	山下 雅幸	2012.4 ~ 2015.3
	村岡 裕由	2012.4 ~ 2015.3	亀田 佳代子	2012.4 ~ 2014.3
	佐藤 一憲	2012.4 ~ 2015.3	竹下 俊治	2013.4 ~ 2016.3
	松村 俊和	2012.4 ~ 2015.3	戸田 求	2012.4 ~ 2015.3
	岩崎 亘典	2012.4 ~ 2015.3	山本 智子	2013.4 ~ 2016.3
	安部 淳	2012.4 ~ 2015.3	遠藤 千尋	2012.4 ~ 2015.3
	長谷川 功	2012.4 ~ 2015.3	藤巻 玲路	2012.4 ~ 2015.3
	東樹 宏和	2013.4 ~ 2016.3	永松 大	2011.4 ~ 2014.3
	小林 真	2013.4 ~ 2016.3	小南 陽亮	2011.4 ~ 2014.3
	大西 尚樹	2013.4 ~ 2016.3	松尾 奈緒子	2013.4 ~ 2016.3
	横溝 裕行	2013.4 ~ 2016.3	櫻井 玄	2013.4 ~ 2016.3
ポスター部会	下野 嘉子	2011.4 ~ 2014.3	発表編成部会	
	丸山 敦	2012.4 ~ 2015.3		
	山浦 悠一	2011.4 ~ 2014.3		
	富田 基史	2011.4 ~ 2014.3		
	衣笠 利彦	2011.4 ~ 2014.3		
	岡田 賢祐	2011.4 ~ 2014.3		
	富田 瑞樹	2012.4 ~ 2015.3		
	和田 直也	2012.4 ~ 2015.3		
	安立 美奈子	2013.4 ~ 2016.3		
	土居 秀行	2013.4 ~ 2016.3		
	内海 俊介	2013.4 ~ 2016.3		
	金田 哲	2013.4 ~ 2016.3		
英語口頭発表賞 WG	上村 真由子	2013.4 ~ 2016.3	野外安全管理委員会	
	高原 輝彦	2013.4 ~ 2016.3		
	辻 和希	2013.4 ~ 2014.3		
	三木 健	2013.4 ~ 2014.3		
	松浦 健二	2013.4 ~ 2014.3		
	久米 朋宜	2013.4 ~ 2014.3		
	嶋田 正和	2012.4 ~ 2014.3		
高校生ポスター部会			委員長	
電子情報委員会 (2012.1 ~ 2013.12)		委員長	鈴木準一郎	2012.4 ~ 2014.3
			粕谷 英一	2012.4 ~ 2014.3
電子情報委員会 (2012.4 ~ 2014.3)		委員長	石原 道博	2012.4 ~ 2014.3
			北村 俊平	2012.4 ~ 2014.3
電子情報委員会 (2012.4 ~ 2014.3)		委員長	大館 智志	2013.4 ~ 2015.3
			飯島 明子	2013.4 ~ 2015.3
電子情報委員会 (2012.4 ~ 2014.3)		委員長	奥田 昇	2013.4 ~ 2015.3
電子情報委員会 (2012.4 ~ 2014.3)		委員長	半場 祐子	2012.4 ~ 2014.3
			池田 浩明	2012.4 ~ 2014.3
電子情報委員会 (2012.4 ~ 2014.3)		委員長	村岡 裕由	2012.4 ~ 2014.3
			飯島 勇人	2012.4 ~ 2014.3
電子情報委員会 (2012.4 ~ 2014.3)		委員長	別宮 (坂田) 由紀子	2012.4 ~ 2014.3
			深谷 肇一	2012.4 ~ 2014.3
電子情報委員会 (2012.4 ~ 2014.3)		委員長	石塚 航	2012.4 ~ 2014.3
電子情報委員会 (2012.4 ~ 2014.3)		委員長	関野 樹	2012.4 ~ 2014.3
			眞板 英一	2012.4 ~ 2014.3

Center for Ecological Research NEWS



京都大学
生態学研究センター
Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3
Tel: (077) 549-8200 (代表), Fax: (077) 549-8201
センター長 中野伸一

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page: <http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

椿 宜高教授が3月31日をもってセンター長の任期を終了し、4月1日より中野伸一教授が新センター長に就任しました。副センター長には、山内 淳教授が指名されました。

2013 (平成 25) 年度 センター活動予定

生態学研究センターにおける2013年度の活動予定は以下の通りです。

センターニュース、セミナーなど、センターの最新情報は、ホームページ (<http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>) で公開しています。

1. プロジェクト

大型共同研究としては、2010年度から始まった「遺伝子発現の季節解析にもとづく植物気候適応の機能解明と予測技術開発」(研究代表者: 工藤 洋)(総合科学技術会議最先端次世代研究開発プログラム)が進められている。また、流動連携機関である総合地球環境学研究所との共同企画プロジェクト(2件)、地球環境研究総合推進費による共同研究(2件)、科学研究費補助金による研究(20件)、JST 戦略的国際科学技術協力推進事業(1件)、国立極地研究所研究プロジェクト(2件)、民間財団寄付金による研究(9件)も進められている。

2. 協力研究員

引き続き、協力研究員(Affiliated Scientist)を公募する。

3. 共同利用・共同研究事業(次頁の表を参照)

2013年度の共同利用・共同研究事業として、分野間の

交流や若手研究者育成の観点から、6件の共同研究、4件の研究集会・ワークショップを採択した。開催日程などの詳細は、当センターのホームページに掲載する。

4. 生態研セミナー

前年度に引き続き、月一回程度(第三金曜日)センター外の方々も自由に参加できるセミナーを開催する。場所は京都大学生態学研究センター第二講義室(会場への道順は、センターのホームページ参照)の予定である。

5. ニュースレターの発行

センターニュースは、印刷物として年に3回(7月、11月、3月)発行する予定である。また、その内容は、センターのホームページでも公開する。センターの活動紹介の他、研究の自由な討議の場を提供していきたい。

6. オープンキャンパス、公開授業

京大附置研究所・センターの一般公開イベント「京大ウィークス」に時期を合わせ、一般公開「授業で習わない生き物の不思議」の開催を予定している。また、大学院入試案内のためのオープンキャンパスも開催の予定。日程などはいずれもセンターホームページに掲載する。

7. 共同利用施設

大型分析機器：DNA 関係では DNA 多型解析、遺伝子転写定量解析用機器など、安定同位体関係では、水の酸素・水素同位体比分析前処理装置（水平衡装置）と GC/C（ガスクロ燃焼装置付き前処理装置）を装備した安定同位体比質量分析計 MAT252 と、炭素・窒素同位体比オンライン自動分析装置（元素分析計）を装備した安定同位体比質量分析計 delta S、炭素・窒素同位体比オンライン自動分析装置（元素分析計）、酸素・水素同位体比オンライン自動分析装置（熱分解型元素分析計）、GC/C（ガスクロ燃焼装置付き前処理装置）、LC/C（高速液体クロマトグラフ付き前処理装置）を装備した安定同位体比質量分析計 delta V の計 3 台。

琵琶湖観測船：高速観測調査船「はす」、「エロディア」が稼動しており、観測調査、実習に利用される。これらの船舶は、旧センター所在地（下阪本）に係留

されている。

シンバイオトロン：ズートロン、アクアトロン、水域モジュールが利用可能である。

実験圃場林園：センター敷地内には、実験圃場、樹種植栽林園、林木群集実験植物園、CER の森、実験池があり、種々の野外実験に利用されている。

上記施設・設備の利用希望者は、事前に担当者に連絡してください。

DNA シークエンサー等関係：工藤

安定同位体関係：陀安

観測船関係：小坂橋

シンバイオトロン関係：奥田

実験圃場林園関係：大園

8. 協議員会、運営委員会、共同利用運営委員会

昨年度と同様、それぞれ数回開催される予定である。

平成 25 年度 共同研究・研究集会・WS 採択申請一覧

藤林 恵	東北大学大学院・工学研究科	共同研究a	メタン酸化細菌のマーカー脂肪酸分析技術の開発
泉井 桂	近畿大学先端技術総合研究所	共同研究a	C4光合成の酵素遺伝子を導入したC4植物における光合成代謝の修飾の程度の ¹³ C/ ¹² C比の測定による検討
SHIAH Fuh-Kwo	Research Center for Environmental Changes, Academia Sinica	共同研究a	Spatio-temporal dynamics of methane oxidizing bacterial community (MOB) and its methanotrophic pathways in Fei-Tsui reservoir
三宅 崇	岐阜大学教育学部	共同研究a	タマバエに送粉寄生されるマツバサ科植物の花の匂いとその役割
宮下 直	東京大学大学院農学生命科学研究科	共同研究a	ツキノワグマによる植物種子の長距離散布の評価：水素・酸素安定同位体比を用いて
大手信人	東京大学大学院農学生命科学研究科	共同研究a	溪流・河川における藻類の硝酸吸収速度の制御要因に関する研究
陀安一郎	生態学研究センタ	ワークショップ	安定同位体生態学ワークショップ2013
奥田 昇	生態学研究センタ	ワークショップ	若手研究者のための夏季観測プログラム in 琵琶湖
小野寺真一	広島大学大学院総合科学研究科	研究集会	リンは何処へ？ーリン循環研究の現在と将来展望ー
近藤竜二	福井県立大学海洋生物資源学部	研究集会	“Big microbes”: International workshop on microbial ecology for young scientists

センター関係者の動き

- 1) 椿 宜高教授が、3 月 31 日付けで退職しました。
- 2) 研究員（研究機関）の吉村謙一氏が、3 月 31 日付けで退職しました。
- 3) 有村源一郎准教授が、4 月 1 日付けで東京理科大学・准教授に就任しました。
- 4) 総合地球環境学研究所の酒井章子氏が、4 月 1 日付けでセンターの准教授として着任しました。
- 5) 平成 25 年度の研究員（研究機関）は赤松史一氏、上船雅義氏、土岐和多瑠氏の 3 名です。